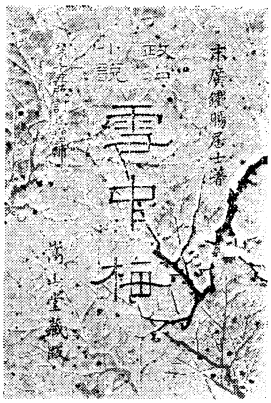
政治小説

雪中梅

末廣鐵腸

政治小説 雪中梅（上編）



（原本表紙）

玉骨氷肌獨自奇。春風十度上二南枝一。
雪埋二幽谷一鶯喉澁。惆悵春皇廻レ翟遲。

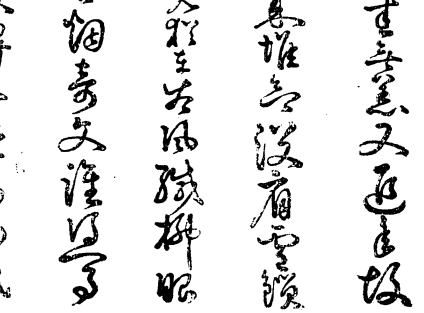
明治二十六年三月　　鐵腸記ス

第十版雪中梅序

雪中梅ノ版ヲ改ムルモノ茲ニ十回ニ及ブ余ハ之ニ因ツテ深ク感ズル所アリ嚮ニ余ノ此書ヲ著スヤ國會開設ノ前ニ於ケル政事ノ有様ヲ寫出シテ世人ノ注意ヲ喚起サントスルニ過ギズ以謂ラク氷雪全ク解ケ春風和融ノ時ニ至レバ梅花飄零シテ復タ之ヲ顧ミルモノ無カルベシト固ヨリ流傳シテ今日ニ至ルベキヨヲ豫想セザリシナリ因テ詩一首ヲ題ス

訂正增補雪中梅序

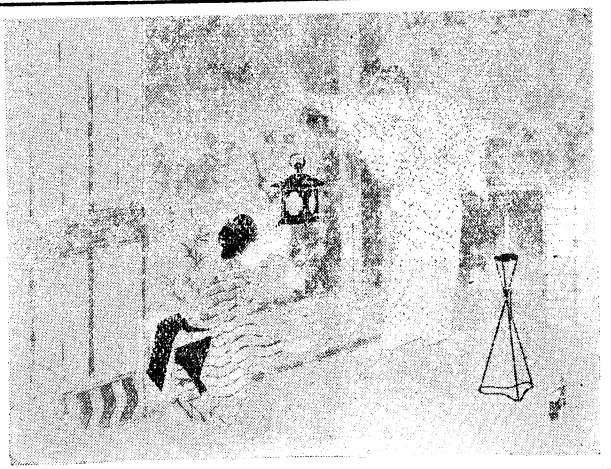
余ノ政治小説雪中梅ヲ著ハセシハ今ヨリ五年前ニアリ當時深ク世態ニ感憤スル所アリ情話ニ託シテ政治上ノ有様ヲ描出スルノ意ニ出デシガ其書ノ成ルヤ料ラズ世人ノ喝采ヲ博シテ四方ニ流傳シ遂ニ大阪ニ於テ之ヲ歌舞伎トナシ東京ヲ始メ地方マデモ之ヲ演ズルニ至レリ其間ニ同名ノ僞書ヲ發兌スル者アリ爲メニ此書ニ向テ多少ノ損害ヲ及ボセシニモ係ハラズ版ヲ改ムルモノ上篇ハ五度下篇ハ四度ニ及ビ發兌ノ部數三萬ノ上ニ出ヅ余ヲシテ一ケ年ノ海外行ヲ爲スヲ得セシメシハ多ク此書ノ力ナリ頃日大阪書肆嵩山堂新タニ鉛版ニ附シテ之ヲ合本トナサントシ余ノ訂正ヲ請フ蓋シ余ノ小説ヲ



（初版本題詞）

著ハスハ此書ヲ以テ最初トス故ニ今日ニ於テ之ヲ讀メバ障ブル其體裁ヲ成サザルヲ覺ユ或ル人此書ヲ評シテ政事論ノ上ニ小説ノ粉ヲ振リ掛ケシモノナリト云ヒシハ誠ニ適評ナリ今ヤ脚色上ヨリ大ニ變更ヲ加ヘント欲セシガ一ハ政事上多事ナル日ニ際會シテ心ヲ文學ニ潛ムルノ閑日月ナキガ爲メ一ハ角ヲ撓メテ牛ヲ殺シ却ツテ此書ノ眞面目ヲ失フニ至ランコヲ恐ルガ爲メ原作ニ就テ其ノ文章語句ニ改正ヲ施シ又ハ增減スル所アリ其ノ一二ヲ擧レバ第一發端ハ叭吧ト大砲ノ聲ヲ以テ起シ一時大ニ批評者ノ賞贊ヲ得タリシガ事情ニ適セザル所アルヲ覺ユルヲ以テ全ク之ヲ修正ス第二井生村樓ノ演説ハ文章體ニ記セシガ其前後ヲ削リ之ヲ言語體ニ改ム第三前年此書ヲ草スルヤ條例ノ施行迫ブル嚴峻ナル時ニアリシヲ以テ記事中往々曖昧ノ言語ヲ用ヒ獄中ノ一段ノ如キ其夢ヲ以テ結ビシハ少ク憚ル所アルニ出デシナリ今盡ク之ヲ變更ス第四山中ニ地方ノ形勢ヲ談ズル處ニ一ノ演説筆記ヲ引用セリ是レハ今日ニ於テ陣腐ニ屬シ且ツ前回井生村樓ノ演説ト相犯スヲ以テ之ヲ削去ル其他ハ一々茲ニ擧示スルニ暇アラズ其ノ趣向ハ舊ニ因レドモ頗ブル文章ヲ修飾シテ稍ヤ小説ノ粉ヲ增加セリ然レドモ是レ余ガ一部ノ政事論ナリ讀者之ヲ普通ノ人情小説ト同一視セザレバ幸甚

鐵腸居士末廣重恭大阪ノ寓樓ニ於テ記ス時ニ欄外寒梅始メテ開キ清香馥郁タリ



（原木口繪）

雪中梅序

跼蹐んで瀕貧しく美人薄命にして才子多病なり大聲は里耳に入らず陽春白雪の歌は人の和するもの少なし天下何の處か遺恨なからん人生何の時か不平あらざらん設ひ聖人世に出でて自ら政事を行ふも人は神明に非ず何ぞ四海の内に於て百事の盡く權衡を得るを望むべけんや惡の罰せられざるあり善の賞せられざるあり國家の爲めに盡力して世間の擯斥に逢ふものあれば一身の私利を營んで百年の榮華を受くるものあるべく混々沌々黑白の顚倒するもの指を屈するに暇あらざらんとす是れ古より高人畸士の動もすれば山林に放浪し詩酒に流連し自ら世外に出でて快樂に一世を經過せんとする所以なり夫れ耳熱して烏々と呼び杯を擧げて天を睨み將た情を丘岳に寄せて其閑靜を樂むもの丶如きは耳目の塵世の事物に觸れざるを以て其の怨恨不平を發するの道なく境遇に從うて自ら適然たるを得べし亦缺陷世界に處するの一方便なりと云ふべし然れども是れ特に消極的の快樂にして積極的の快樂にあら

ざるなり若し夫れ一筆一墨凡に倚り紙を展ばし以て一の世界を造り出だし忽にして雨露降り忽にして雷霆起り金鼓鳴り絃歌響き或は宴會たり或は闘争たり佳人に才子を配し名主に賢臣を與へ志士仁人の流離顛沛する者をして天下の政柄を掌握せしめ兒童婦女の心情より小人卑夫大姦巨猾の狀態に至るまで其笑ふべく悲むべく泣くべく怒るべきもの一々之を寫し出して紙上に躍如たらしめ與奪意の如く生殺自在なるは是れ眞に造化の權力を掌握する者にして其快樂たるや殆んど名狀すべからざるものあり而して世の憂思あるもの雨朝月夕之を讀んで奇と呼び妙と叫び恍惚無何有の鄉に遊んで其身の不愉快なる天地に在るを忘る亦何ぞ愉快なるや之に加ふるに小說の上乘なるものに至りては能く世人を感化し想像を以て造り出だせる世界に向うて歩を進めしむるの利益あり蓋し今日の社會は高山の如く其の山麓を成す下等人民の部分は太だ廣大なれども其の山巔たる上等人民は極めて狹小なり而して難を避けて易に就き苦を捨てゝ樂に趨るは普通人間の天性なるを以て若し嚴格なる文章を以て高尚なる道理を說く時は之を讀むもの數行にして睡を思ひ其の卷を擲る能はず熱血を吐露して著述したる書籍も遂に覆瓿と爲りて復た之を顧みるもの無きに至る若し平易の文辭を以て普通の感情に訴ふれば愚夫愚婦と雖も亦喜んで之を玩味し知らず識らず我が誘導する所に從うて其歩を進むるに至るべし是れ所謂る因緣生法なるものにして其功たる何ぞ石を鍊つて天を補ふものに異ならんや錢賜居士は我が鄉の人なり人となり嚴毅方正其出でて政事世界に奔走する茲に年あり或は長江の筆を揮ひ或は懸河の辯を鼓し以て社會の人心を提醒する一日に非らず近頃適ま政事小說を著はして雪中梅と名く余之を閲するに其の行文の流暢にして趣工の新奇なるは固より論ずるを待たず其の寓意の時勢に切なる警者をして爲めに感動に禁へざらしむ知らず宋廣平の再來を以て自ら任ずる人にして何の思ふ所ありて此の遊戯三昧を爲すや蓋し數年以來我邦政事世界の漸く沈睡の有樣に陷り懸河の辯長江の筆も亦十分の效用を奏する能はざるものあるを見て竊かに憤懣に禁へず乃ち余の所謂る一の世界を造り出だして自ら樂み併せて其の樂を他人に及ぼし以て社會の間に在る不平の氣を解散せんと欲するものに非ざるなきを得んや然らざれば居士の才高く志大なるを以て何ぞ時風を趁うて兒女の好に投ずるが如きことあるべけんや世人若し筆墨なき所の處に於て一種の清香を飛ばさば則ち善く雪中梅を讀むものと云ふべきのみ

明治十九年八月　南海の一書生三宮孤松

駿臺の僦居畫美人樓上に記す

發端

祝砲發　天國會逢三百五十回開期一
斷碑出　地父老想三十九世紀名士一

秋の宮イト晴れ渡つて一點の雲も無く廣き東京城中は家毎に日章の國旗を飜へし街上を往來する馬車人力車はサナガラ織るが如く折柄練兵場の原にて打ち出す祝砲ドン〳〵と鳴り喇叭の聲も嘹喨として耳に澄めり今或る家の内にて二人の紳士が對座し一人は年頃五十ばかりに見え此家の主人と思はるゝがイト喜ばしき顏付きにて

△イヤ祝砲が始まりました今日は丁度明治一百七十三年十月三日國會の祝日で御座いまして本年度の帝國議會も今日開會

となり　天皇陛下は群臣を率て議場へ御臨幸になると云ふことですから定めて上下兩院の議院は盛んな儀式を備へて　陛下を奉迎し萬歳を祝する事で御座いませうと云へば一人の頭に白髪を戴くイト上品なる紳士が　○左様々々お互に此繁榮の世の中に生れて安樂に老年を過すのは誠に仕合な事で御座います此四方四里餘りの東京は一面に煉瓦　高樓となり電信は蛛の巣を長つこ張こてをよし方に　ノ　ろ　上の

（初版本挿畫）

電氣燈は白晝に異りません其の上東京港には萬國の商船を繫いで商賣の盛大なのは龍動巴里も三合を避け　陸に數十萬の强兵があつて海に數百の堅艦を泛べ世界中日章國旗の飜へらぬ場處もなく教育全國に普及して文學の盛なる萬國中肩を比ぶる者もなく政治上の有様を視れば上に　至尊至嚴の帝室が有りて下には知識と經驗に富む國會があり改進保守兩黨の競爭で滑かに内閣を交代し憲法確定して法律よく整ひ言論も集會も盡く自由であるのに少しも弊害のないのは古今の歴史上に於て比類なきことと思ひます百年前迄は亞細亞中貧弱の邦國と云はれて歐米諸國の爲めに輕蔑せられましたが暫時の間に國勢が一大進歩をなしたのは畢竟天皇陛下が聖明の君主にましまして夙に立憲政體を立る　聖詔を下し遂に明治二十三年の本月本日に國會を御開きになり夫れから次第に世運が進歩して今の様に成つたのですから御互に子々孫々迄　皇室に忠義を盡さねば成りません　△誠に君の御説の通りであります去りながら私が幼少の時分に祖父抔から話に聞たことがありますが明治十三四年の頃には政府と人民の間に種々の軋轢がありまして十六七年より十八九年に掛けては世間が大不景氣で民間の政治思想がなくなつて仕舞つたト云ふことで丁度其の時分の人が書た二十三年未來記と云ふ書を讀で見ますに夢に託して政治社會の有様を示し屹度不完全な國會が立つに違ひないと隣言してありましたが如何して其事情が一變して目出度世の中に成つたのですか古い事だからサッパリ私共に譯が分りません　○御尤の御不審で御座います百年前の歴史も世に傳らぬものが多いから當時の事實を尋ねるには太だ不都合ですが古語にも云ふ通り隱顯有時で　私は不思議なことで國會開設前後の事が精細に分る奇書を得ましたト云へば一人は膝を前め　△ハテ夫れはドンナ書で御座いますか　○マアお聽下さい先日の大雨で上野博物館の後に當る鶯谷の崖が崩れると其中から一の石碑が出ましたのを給人朝野新聞で電氣銅版に寫して掲載しました久しく地中に埋つて居たと見えて碑文には磨滅した處が多いが篆額の鶯溪先生之碑と云ふ處丈けは明白に讀めましたソコデ記者が鶯谷と云ふは此石碑から名を得たものであらうと説を付けましたが是れは大層な間違で明治維新の時よりも前に出來た書物に上野の　鶯谷と云ふ名前が見えますから百四五十年以來の地名とは思はれません此節では大厦高樓が軒を接する

（初版本挿畫）

繁盛の場所になりましたが昔は隨分閑靜の地であつたと云ふことですから國會開設に盡力した人が功成り名遂げて此地に隱れ鷲溪と云ふ號を付け其後有志者が有りて記念の爲めに石碑を立てたものと思はれます今日の新聞で昔の事を論ずるには兎角附會の說が多いから容易に從はれませんト話し立つるを一人は傍りに耳を傾け △夫れは妙です貴君は其新聞を御所持ですか」主人は側にある金唐革の箱の中より一ツの新聞を取出し ○「是れであります」相手の老人は一寸標題に目を付け △ハテ繪入朝野新聞第四萬九千五百三十號ヨク古くから續いたものですト云ひながら懷中より眼鏡を取出し大なる洋紙四ツ折の新聞を披いて視れば細密なる挿畫が幾ツも有りて其間に古碑の寫眞を掲げりナル程 これは妙です 文體と云ひ書風と云ひ百年前のものに相違御座いません 殘念なことには闕文があるので何分にも讀めぬ處が多い樣ですが前後を推して考へて見ますれば鷲溪と云ふ人は如何にも豪傑の士で夫婦ながら社會の爲めに盡力したものと思はれます何うかして此の人の傳記を見たいもので御座いますダガ此碑文の樣子では兼て祖父などから承はつて居る國會開設前後に名のあつた彼の何野とか云ふ先生のことかも知れません ○「此の碑文中に先生の事蹟は雪中梅花間鶯の二書とあつて其の上の一字が闕けて居りますが多分載の字か詳の字でありませう此の書があれば定めて當時の事情が分るであらうと思ひ方々聞き合せて見ましたが何分にも古いことだから知つて居るものが御座いませんソコデ不圖考へ付き上野の書籍館へ參り色々と捜索してヤット見付けましたから數日筆耕者を賴んで先づ雪中梅丈けを寫し取らせました文章も中々面白い上に談話の模樣をありの儘に書たものですから能く人情を寫し出して明治二十三年前の政治社會を眼前に見る樣であります名士賢女が種々の艱難を忍んで國會の設立に盡力する處などは時代の違ふ今日の人にまで非常の感動を與へますと云ひつゝ「テーブル」の上の鈴を鳴らして書生を呼び書齋にある一册の寫本を取り出して老人に渡せば老人は押し戴き △「ソレは有り難いナ」雪中梅錢賜居士著と夫れでは著者は矢張り二十三年未來記と同人ですな定めて國會開設前の有樣が善く分りませう何樣國會百五十年の祝日に此の樣な古書が手に入ると云ふのも誠に不思議なことで御座いますハテ目錄は漢文で書てありますな

雪中梅上編目錄

第一回 老母憑枕示遺訓 少女揮涙告素懷
第二回 壯士盛試辯論正義 少年初纂名聲井生村樓
第三回 烏凡讀書獨傷情 赤心對客大談形勢
第四回 數月逋債店主罵爾 一字誤筆郵書酔奇縁
第五回 書生官生關新聞 警生學論佐藤志 囚徒首拘服留
第六回 獄中半日雨暗斷腸 中上一首歌忽激志
第七回 少女動名士心 秀才認恩人書 一十三絃 一冊

第一回

老母憑枕示遺訓 少女揮涙告素懷

「コン〳〵コンお春や一寸來てお呉れお春は居ぬかえト五十餘りの婦人が病氣と見えイト痩せ衰へたる顏を縛り枕の上に置き苦しさうに咳を

し乍ら呼び立る聲に應じソット唐紙を開き立ち出でたるは年の頃十六七の少女にて靜かに枕元に座を占めソット病人の顏を眺め「御母さん何の御用で御座います先きまでお側に居りましたが餘り能くおよツて居らツしやるから一寸彼方で新聞を讀んで居りましたワモシ四時で御座いますからお藥を召し上りませんかと云へば老母は顏を振り「マア藥は止しませうお春や此樣な事を云ふとお前が猫のこと心細く思ふだらうが私の體はモウ長い事は無いヨ」小女はハット思ひ少し眼中に涙を持ち乍ら左あらぬ體にて働に力を入れ「御母さんナゼそんな弱い事を仰しやいます昨晩もアノ先生が御歸りの時に玄關まで送つて參りまして御病氣の樣子を聞きましたらネ御母さん長い御病氣の事でもあるし隨分お弱りではあるが未だ左して御老衰と云ふ程でもないから今に御全快になるに相違ないと云はれました御母さんサウ力を落したものでは御座いません　老母「ウソ〳〵　昨日山本さんが御歸りの時にお前が玄關へ出て何かヒソヒソ話しをする樣子だから耳を立てて聞いても話しの模樣はサッパリ分らなんだがお前が玄關へ來た時に眼中がうるんで居たので山本さんの云つた事も大抵分りました　少女「いゝエあの時は勝手で「サン」が御飯を焚て居て餘り煙りましたからツイ涙が出たので御座います　老母　さうでは無いヨお醫者はなんと仰しやつたか知らないが早や一年越しの肺病で此の樣に痩せるばかりだものの如何して癒るものかネと云はれて少女は聲を震はし「御母さんの御病氣が此の上お惡い時には私は獨りで如何なりませうソンナ心細いことを話して下さいますな老母も眼中に涙を浮べ「コン〳〵私も死たくはないが壽命のない

（初版本挿畫）

は仕方が無いではないか私とお前は御國からハット思ひ少し眼中に涙を持ち乍ら左あらぬ體にて働に力を入れ「御母さんナゼそんな弱い事を仰しやいます昨晩もアノ先生が御歸りの時に玄關まで送つて參りまして御病氣の樣子を聞きましたらネ御母さん長い御病氣の事でもあるし隨分お弱りではあるが未だ左して御老衰と云ふ程でもないから今に御全快になるに相違ないと云はれました御母さんサウ力を落したものでは御座いません　老母「ウソ〳〵　昨日山本さんが御歸りの時にお前が玄關へ出て何かヒソヒソ話しをする樣子だから耳を立てて聞いても話しの模樣はサッパリ分らなんだがお前が玄關へ來た時に眼中がうるんで居たので山本さんの云つた事も大抵分りました　少女「いゝエあの時は勝手で「サン」が御飯を焚て居て餘り煙りましたからツイ涙が出たので御座います　老母　さうでは無いヨお醫者はなんと仰しやつたか知らないが早や一年越しの肺病で此の樣に痩せるばかりだものの如何して癒るものかネと云はれて少女は聲を震はし「御母さんの御病氣が此の上お惡い時には私は獨りで如何なりませうソンナ心細いことを話して下さいますな老母も眼中に涙を浮べ「コン〳〵私も死たくはないが壽命のないのに仕方が無いではないか私とお前は御國から來て未だ一年もたゝぬ内に御父さんは彼のやうになりなさるし頼みに思ふ梅次郎さんは今に行方が知れず其の上に私が此の通り大病になつたからお前はどの樣に心細い事だらうと私は大れ許りが氣にかゝるよコン〳〵眼をねむらぬ内にお前に話してコン〳〵さうしてお前の心を聞て置きたい事がコン〳〵コンと咳にて詞も絶々になれば少女は氣遣はしき顏付にて「御母さん其の樣なお話しはお止なさいヨ大分お咳が出ますぜ山本さんも長い話しは成るだけなさらぬ樣にと云はれたでは御座いませんか「サン」やお藥を持てきなサア横におなりト云ひつゝ老母を臥かせてソット蒲團を掛けしが程なく老母は病の疲れにスヤ〳〵と寢入りたり少女は枕上にて悄然と物思はしげの顏付なるが色は白雪を欺き鼻筋通り眉秀で眼中も冷かにして何處となく愛嬌あり數日前に結びしと思はるゝ島田髷は少しく亂れて黑髮面に垂れ母の寢顏を窺ひて「ハラ〳〵と涙を落し手巾にて之れを拭ふ有樣は梨花一枝春帶雨の風情なり姑くあつて老母はコン〳〵咳をして目を開き「オヤお春はまだ其處に居るかえツイウト〳〵と睡つた内にまた御父さんの夢を見たがなんぞ浮言でも云

ひはせなんだか　少女「いゝエ何にもお言ひはなさいません　老母「お春モウ私は迚も長いことはあるまいお前は今梅次郎さんに逢たら其の面貌が分るであらうかト問はれて少女は顔を赤くし「ハイ彼の寫眞は仕舞て御座いますが餘りよく寫ツて居らぬと御父さんが仰しやいましたから一寸途中で逢ひました位では分りますまいヨと云ひつゝ何事か思ひ出だし胷を傷むる模樣なり　老母「さうかお春も知ツて居る通り御父さんはアノ御氣象で當世の女は昔し風では行かぬ琴や三味線は大抵で善いから十分に學問をさせると仰しやるしお前も書物が好きでトウ〳〵女教師にまで成つたから早く養子をしたいと思つても御父さんは國の若い者には一人も氣に入るものがないから東京へ出た上で善い人を見立てて知らせようと云ツて御出京になり其の後ち梅次郎さんの人品を委しく手紙に書き先き先き見込のある男だから養子にしたいとて寫眞までお送りになりお前も此の人ならと云ふから其の返事をして程なく二人で東京へ來て見れば梅次郎さんは其前に北海道とやらへ往ツて其れ限り行先が分らぬ樣になつたが聞けば犯罪の嫌疑とやらで身を隱されたと云ふ事で私は落膽したがコン〳〵コン　少女「御母さんまたお咳が出まするからソンナお話しはお止めなさいナ　老母「いゝエ先刻からいつもになく氣分がいゝから言ひたい事を皆んな話して置くヨところが御父さんは梅次郎は學問もあり分別もあるから暴動などにたづさはる筈はない是れには何か譯があることヂャとて誰れが何と云つてもお聽入れが無かつたが御父さんの御隱れ後早や二年越になつても梅次郎さんの音沙汰なし母子二人で杖ともなり杜ともなつて暮す内に私は明日も知れん大病になつたからお前が能く覺悟を極めて呉れねばならぬよコン〳〵コン　少女「御母さん夫れは何の事をおつしやるのでお前は何ぼ發明でも女のことだから何時までも一人で此の富永の家を持つ事は出來まいから私がどうかなつた跡で早く身の落付をせねばなりませんヨだがお前は何時までも梅次郎さんの音信を待つ心算か私の聽いて置き度いと云ふのは此の事サお春默つて居てはお前の心が分らぬではないかト問ひ返されて小女は面を赤くし手にて袖を揉みながら始に思案の體なりしが「深谷さんは宅の養子に定つたと云ふではなし只だ御父さんの口約束ばかりで御母さんさへお逢なされぬ程ですから何も私が義理立てをして深谷さんを待つには及ぶまいと思ひます夫れでも前々から御父さんのお話しも聽て居りますし私も深谷さんの書きました物を持つて居ますが大層文章も面白う御座います上に學問もある樣でして中々並の人とは思はれませんワ私も此の先き洋學をして見たいと思ひますから御母さんに萬一の事がありました時には内の事は叔父さんにお賴み申して置きまして私は何處かの女學校へ往つて勉強しようと思ひます二三年立つても深谷さんの行方が知れませねば其の時になつて叔父さんと御相談をしても宜しいでは御座いませんかとイト決心したる答を聞いて老母は喜ばし氣に娘の顔を打ち見やり「お前の考へを聞いて私も君心安心をした御父さんもお隱れの時まで梅次郎さんの事を氣に掛けてお出でであつたが寫眞を見れば何だか日姿が威ろしい樣でもあるし其の上色々の評判もあるからお前がどう思つて居るかと内々心配をして居たがマア夫れで御父さんの念が屆くと云ふものだお春何卒二三年は外から養子を取らずに居てお呉れ其の内には深谷さんの行方が知れるかも知れないからアヽ安心した草臥たドリャ寢ませうト云ひ乍ら又少しく聲を上げ「お春まだ言ひ遺した事があるヨ　少女「モウ今日はお話しはお止しなさいナ　老母「外の事でもないがネお前も知つて

居る通り彼の叔父さんは本統は他人でもあるし私の邪推かは知らんがどこか安心の出來ん人の樣に思ふよソシテ内の地面や公債證書は皆んな御父さんのお骨折で出來たのだから能く氣を付けて人に取られぬ樣におしヨと話しの内に灭德寺の夕暮の鐘の聲ゴン〳〵響き渡り秋風に散る木の葉パラ〳〵と窓を打つにぞ　小女「オヤお話しをして居る内に最う暮れかゝりました

第二回

壯士盛試辯論正義社員　少年初戀二名聲一井生村樓

頃は三月の末にて天氣も殊の外麗らかなれば淺草橋の邊は人出も多く馬車人力車の往來織るが如く非常に雜沓せり今や洋服を着たる二人の紳士は逸先きになり馳せ來る車を右左に避け橋を渡つて三四町も歩みしが一人がフト立ち止まり横町の入口に大きな紙札を掲げ今二十日午後一時より井生村樓に於て正義社政談演說會とありて其の脇に許多出席辯士の名前を筆太に認めてあるを見認め後より伴れの男に聲を掛け「オイ中村君今日は井生村で演說會があるぜ往つて見ようヂヤないかと云へば一人は後を向き　○今朝朝野新聞に演題が出て居たのを見たが聽く程のものはないぜ其の上少し時間が後れたから止めよう　△早く出る奴はどうセ駄目だ丁度いゝ時分だ奥山へ往つて見るものはあるまいヨ井生村へ行くべし　○「仕方がない十錢散財して御突合をしよう」二人は脚を轉じて横町に入り　△大分人が出掛けたネ久しく演說が無かつたのに今日は一二人上手の名前が見えるから遊歩に出た奴は皆來るだらうアレ又巡査が入口の前に居るぢやアないか　○政談もいゝが巡査の劍つくを喰ふには閉口サ　△自分が法律を犯しさへせにやア何も巡査が怖いことはない筈サと云ひつゝ今二三人の書生風の男が不平らしき顏付きにて歸り來るに行き逢ひ一人の紳士は小聲にて　△彼奴等は門口から追ひ歸されたのヂヤ彼の風俗では誰が見ても學校の生徒と鑑定が付くから面倒かさうと思ふのが横着ぢやと話しの内に早や井生村樓の門前に到りしが方さに室内に入らんとして庭口に立つもの七八名あり巡査は一々之を呼び留めて姓名を問ひ書生風の者に至つては一々其の寄留する町名番地屋號を尋ねて之を手帳に書き留め其の官私學校の生徒に非らざるかを聞き質し然らざることを辯明せしめ始めて通行を許す若し學校生徒なりと思ひ之を說諭すれども聽かずして強て入場する者ある時は電報を以寄の警察署に掛け其宿所に就いて之を取調べ愈よ生徒に相違なき時は之を警察署に拘引して裁判所に告發し集會條例に照して罰金を命ずる事あり其の外當時執れの政談演說にても會主より一々其の論題及び演說の大意を屆け出でさせ治安を妨害すると見做すものは之れに認可を與へず又演說の場には警察官の出張あり其の言論の詭激に渉る時は之れを中止して聽衆を解散し其の上地方官又は内務省より辯士の公衆に向つて政談を爲すことを禁止することも間々あり善し明治十二三年頃は日本國中一時に政治の思想を發達し言論の勢力も大だ熾盛なりしが辯士の内には時に過激の說を吐くものあり大に政府の警戒を引起し遂に集會條例の制定あり其の後更に數回の改正を經て條例の施行は愈よ嚴重となり東京府下にて辯士の淵藪なりと云はれたる國友會嘸嘸社の如きも數度の中止解散に逢ひ十八年の春より冬に掛けては一時盛大なりし演說會も多分は廢止となり氷雪の野を蔽ひて草木の枯槁せしが如く如何にも慘憺たる有樣なりしが群陰窮つて一陽を生じ方さに一の豪傑の士有つて社會の間に出で誠心を以て上下を感動し社會の政治思想を喚び起さんとす氷雪の艱苦を凌いで百花の先魁を爲す誰か其の高節を欽慕せざらんや閑話休題二人の紳士は巡査

の許可を得て堂上に入れば百餘疊の廣座敷は聽衆充滿して立錐の地もなく正面には一脚の卓子あり一人壇上に立ち辯論方に央なりと見え笑ふ者あり叫ぶ者ありノー〳〵ヒヤ〳〵の聲相間雜して最も雜沓を極む辯士の右方には警察官二名劍を帶び正服を着して儼然と椅子に倚り書記一名鉛筆を手にして頻りに辯論の大意を筆記す東の方の壁には六七張の張紙ありて辯士の姓名と論題とを掲げり第一には奮起せよ國民天野權次郎とあり其の次ぎは同胞兄弟に望む所あり秋野鶴三郎最後の三張は同等の權利武田猛社會は行旅の如し國野基誰か政黨の競爭に權變を無用と云ふや川岸萍水にて其餘は紙尾風に飜へり又は辯士の背に隱れて一々讀み取るべからず壇上の辯士は既に三四十分も演述せしと思はれ而上に紅色を帶び稍や逆上せし氣味合にて瓶中の水をコップに移して一時にグット飲み干し再び說き出だして曰く

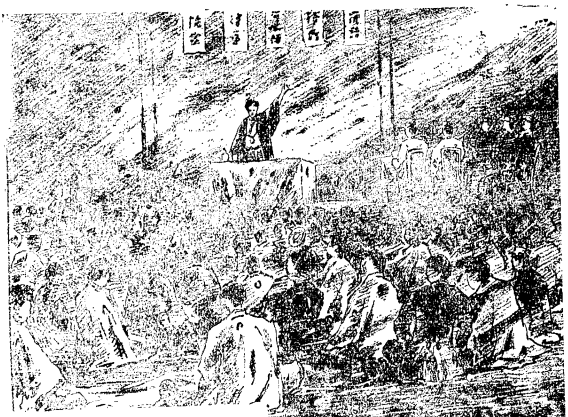
エヘン僕が反覆の辯論で權利の同等であることは諸君も既に御了解になつたであらう、エヘン然れば他日國會開設の時に至り財產や知識が、エヘン乏いとて下等人民を政權の外に擯斥するの理由なきは誠に明白であります（ヒヤ〳〵ノウ〳〵）歐洲にても英米諸國の如きは（ハヽア〳〵ハヽア〳〵）皆同等權利の主義が實際に行はれて（ノー〳〵）居りますが獨り壓制な獨逸などはエヘンウンビスマルクと云ふ專斷家があるから憲法上は立派でも人民の權利が十分に擴張しません諸君よ我邦二十三年の國會をして英米の如くならしめて魯西亞や獨逸の如くならしむる勿れ

握り拳にてドンと卓子を打いて壇を下る座上拍手の聲パチ〳〵パチ　○武田は中々熱心の樣だが何を言ふのかサッパリ分らんヂャないか　○皆んな差して甲乙はないサ時に今度出て來る國野と云ふ男は是れまで一度も名を聞たことも無い樣だネ　○左樣サ論題は立派ヂャが多分此節田舍から出て來たのであらうから感服する程なことはあるまい數百人の聽客は彼處に談じ此處に話し滿堂囂々たり程なく緣側の玻璃障子を開け一人の少年シヅ〳〵聽衆の間を通つて壇上に登れり年齡は二十四五なるべし肉少しく痩せ顏色白く眉黑く脣紅にして眼光鋭く威儀堂々として犯すべからざるの勢あり去れども イト古びたる鈍綠の絮衣に蒐色の羽織を着し「メリンス」のヘコ帶を締めたるは問はずして其の零落書生たるを知るべし卓子の上にある眞鍮の瓶より水をコップに移し聽衆に目禮して方さに口を開かんとす處々に二三の拍手あるのみにて堂上の喧嘯未だ定まらず此の少年は意氣殊に安閑として毫も急遽の狀なく先づ百里を往くものは九十里に半ばすと云ふ古語を引き一の旅人が一日地方を出で其の日の夕方に或る都府に達する考へなりしに道路は普請中にて人力車も意の如くに進まず其の上中途より大風雨に逢うて困難を極めトウ〳〵夜半まで掛つて十里ばかりの道を往きしことを說き忽ち眉を擧げて玲瓏の音を發し

一日數十里の行旅すら此の通りであります別して十年の歲月を期して萬里の遠征を試みるものは十分の覺悟がなければなりません早や五年の星霜を經過しながら一の高山を踰えず一の大川を渉ることが出來ませんならば將來五年の間に於て最初に豫期した遠征を成就することは思ひも寄りません夫の如くなれば二十三年の國會を如何いたしませうか

此の時少年の容貌儼然として音聲次第に高く喝采四壁を震動し數百人の眼睛は皆少年の面上に注射す少年は徐々コップの水を飲み干し少しく喝采の靜まるを俟ちて更に說き出して曰く諸君七八年前を回顧せられよ我が同胞兄弟は大に政治上の熱心を增加し國會々々と叫

ぶの聲は全國の間に反響し恰も百雷の落るが如く地方の有志者は幾百人又は幾千人の總代と稱して東京に出掛け大政官の門前に立つて國會の開設を請願し風砂に觸れ炎暑を冒し番兵の爲めに叱責せられ一歩も門内に入ることが出來んのをも更に意とせず涕泣號哭して必ず願意を貫徹せんとしたではありませんか程なく明治十四年十月十四日の聖詔が出ましたが國會の開設は實に十年



井生樓演説會之圖（初版本挿畫）

の後でありますから前途を考へて見ますれば丁度旅客が始めて家を出で百里の雲山を有無渺茫の間に望む樣な想ひがありました（ヒヤヒヤ）去れども世の有志家は益す奮勵いたし此の十年の間に於て十分の準備を整へて國會の設立に應ずる積りにて第一着手として政黨を組織しましたソコデ自由黨改進黨を始め立憲政黨とか九州改進黨とか多くは數萬少なきも數千の人員を結合して運動を試みました凡て如何なる事物にても最初より完全を求めることは出來ません今日から此の時に成立した政黨の有樣を回顧しますれば隨分色々の弊害があり情實に囚つて結合したものもありますれば封建の精神を帶るものもあり破壞主義を抱き虛無黨社會黨の所爲を學ばんとしたものもあつた樣で す去り乍ら是れ等は一時の弊害でありますから數回の改良を經て純然たる政黨と爲し國會の必要に應ずる望みの無いではありませんから私も當時竊かに改良の道を計畫しました（謹聽々々）第一は小團結の解散して大團結となし第二は博く學者と實際家を黨中に網羅して活潑なる運動を試み第三は空漠にして事實に基かず激烈にして破壞の性質を帶ぶる言論を制止して全國の政治思想を呼び起し第四は黨中に課を分けて立法行政の事務を調査いたし何時にても國家の大事を擔當する準備を整へるのであります民間に此くの通りの政黨が無い時には假令國會が設立になつても十分の利益を實際に視ることは出來まいと思うたことであります（大喝采）然るに一時に成立した政黨は空中の蜃氣樓の樣に忽ち消え失せて仕舞ひ二十三年の準備は一も整頓せずして早や五年の星霜を經過しましたのは丁度二十里の旅行を爲すものが僅かに六七里を往きて既に日中になつたと同樣であります（ヒヤ〳〵）今より車を驅つて疾行せようと思ひましても前途には高山もあれば大川もあり不意に風雨の變に出逢ふこともありますから能く注意をせねば遂に闇夜を冒して長途を奔る樣な危險がないとは申されません

此時喝采四方に起り雜ふるに能辯の隊長と呼ぶ聲を以てす而して少年は面上に鉄石の色を現はし來り

一時盛であつた政治思想の俄に退歩に就いたのは其の原因がなければなりません數年前に遡り民間志士の所處を指斥するは私の心に忍びん所でありますが將來の注意の爲

めには過去の弊害を知るのは隨分必要なことでありますから忌憚なく陳述いたしませう國より政府が一時施行せられた政略も我國の政治思想を退歩せしめた一の原因ではありませうが（ヒヤ〳〵）私は今之を論ずる暇がありませんから專ら民間の志士が自ら失敗した事實を擧げて進んで前途に疾驅するものに覆車の戒を示さねばなりません

空理空論を主張して實際家の同意を得ることの出來なんだのは政治思想の退歩を致した第一の原因でありませう前年來社會に率先して民權自由の論を唱へた人々は氣象も高尚にあれば精神も中々活潑でありましたが其の議論の根據とする所に至つては隨分空疎杜撰の譏を免かれません當時專ら社會に流行した議論の要領を擧ぐれば曰く天賦の權利曰く平等の自由曰く全く政府の干渉を廢止せざれば最大幸福を得べからず曰く政府は我々の權利自由を保護するに止まり社會の福利を增加せんとする所爲の如きは其の適當なる職掌に非らずと甲唱へ乙和し漢口殆んど一に出づるが如くルーソーの丈呑でなければスペンサーの假聲であります（ノー〳〵諸君如く靜まつて私の說を御聽下さい一二の先輩が哲學上の理論を引用して政治上の改革を主張しました處が世間は一時に之に風靡し英佛政治哲學の說は一時の人心を支配し遂に我が政治上の議論は丸で空想となり事實に就て利害を比較するものを擯斥して因循姑息の陳言を爲し大聲をして權利と呼び自由と叫べば非常に世間の喝采を得ました夫れ故に世の民權家は一部の哲學書を以て六韜三略と爲し又政治上の萬病に效能ある金丹の樣に思ひ做し實務の利害得失を不問に付し去るに至つたのは不思議なことであります元來哲學は學者の講究すべきものでありまして政治上の改革を主張するものが之を以て反對黨を攻擊する手段と爲すのは亦一の政略と云はねばなりませんが歷史上の關係を度外に置き風土人情の如何を究めず徒らに想像の政治社會を論ずるときは遂に實際家の爲めに擯斥せられねばなりません（然り〳〵）往日據戰悲壯の士が四方に奔走して民權自由の說を主張しました時に世故に熟練ある老成家は後進子弟が意氣の盛んにして辯論の巧みなるに驚き乍ら其言論の空理にのみ驕せて實際に施行すべからざるのを歎息いたし政治思想の單純なものは最初其の議論を聞いて精神を引き起し自ら民權家の一人とならんと思ひ立つものの其の辯論家が說き去り說き來る所は天賦の權利とか平等の自由と云ふのみにて千言萬語一の狹隘なる圈中を出でませんから自然に之れを厭ふの意を發したに違ひ御座いません夫れ故に私は議論の空漠に流れしを以て政治思想の退歩に就きし一の原因と斷言せようと思ひます（大喝采）

言談擧動の激烈粗暴にして中等社會に在る人々に危險の感情を引き起さしめたのは政治思想の退歩に就いた一の原因でありませう下等社會に在るものを煽動いたし其の聲援に依つて勢力を得んとするのは亦政治家の一手段と云はねばなりませんが財產ある者と勞力社會とは利害を異にし教育あるものと知識なきものとは感情が違ひます故に一方の贊成を受くるときは必ず一方の爲めに反對せられねばなりません夫の一時に流行した自由平等の議論は歐洲哲學家の說を學んで席上の談柄としたのでは無く國會開設の上は此の主義に基きて政治上の組織を定めるに積りであつたに相違御座いません若し論者の希望に從へば今日の我國に於て普通選擧を行ひ下等社會の財產もなく知識もなきものに迄も政治上の權

利を與へねばなりません此くの如き過激の改革は中等以上の社會に如何なる影響を及ぼすものでありませうか論者の間には社會黨の主義を奉じ口を極めて上等社會を攻擊し財産平均論を主張したものがありました此れ等は勞力社會の喜ぶ所でありますけれども財産あり知識あるものが不愉快の感情を起し正面に立て反對する樣になつたのは自然の勢であります其の上に奇異の擧動を爲して世人を驚かし或は腕力に倚賴して一敗地に塗れ自ら法律上の罪人となり老成の人々をして一部少數の人を損斥するが爲めに自由論全體までも有害視せしむる樣にならしめたのは是非もなき次第と申さねばなりません言談擧動の激烈粗暴なりしを以て政治思想の退歩に就いた一の原因と申すは之れが爲めであります（喝采）

更に一歩を進めて論じますれば民間の政黨員が自ら結合を務め先づ自ら堅固にして動かすべからざる組織を立つることを知らず輕擧して政權を爭ひしが如きも政治思想の退歩を致した一原因でありませう元來社會は優勝劣敗の作用に出づるものでありますから民間の政黨に强大の勢力があり公議輿論の贊成を得ました時には廟堂の君子も甘んじて之れに政權を讓り渡さるゝに違ひありません（ヒヤヒヤ）去れども英國などの樣に輿論の風潮に因つて容易に內閣の交迭を生ずる習慣のあるものを除き他の邦國に於て民間の政黨員を以て優者の地位に立たんとするには勢力知識の現在政府に一倍せねば容易に目的を達することは出來ません四五年前一時社會に成立しました政黨は內部の秩序も整頓せぬのに正面に立つて政府を攻擊し其の反動に因つて自ら分裂潰散したのは誠に是非はない次第であります當時の有樣を以て戰爭に喩へますれば玆に一つの堅城があり野武士等は其城中に金銀財帛のあるを聞き傳へ彼處より三人此處より五人と次第に集まり來つて數萬の同勢となり此の城を遠卷きしました元來生存競爭の法則に於て平時は自衞の不十分なものにでも外面より刺衝するもののある時には忽ち之れに應ずる準備の出來るが自然の勢であります政黨は旗鼓を整へて八方より政府を圍繞しましたから政府は曾壁を築き大砲を備へて防禦の手配りをなし夫れと同時に四方を圍繞した政黨の軍勢中に內訌を生じ四分五裂に就き自ら甲兵を放棄して遠く奔竄したのは誠に氣の毒千萬のことであります

官權黨の假聲を爲す勿れと叫ぶものあり少年は袖の中より手巾を出だして面上の汗を拭ひながら座上を見渡し諸君の內には耳の惡き人もあると見えると一言し笑容掬すべく更に語を次で

政府は一時の警戒に因つて大に內部を整へ再び外敵の襲來するとも屹然として動かぬ樣になりました私の考へますには明治十三四年の頃に當り政黨が四方より起つて政府を攻擊したのは政府の爲めに此の上もなき利益で所謂る雨降つて地固まるの喩の通り此の四五年間に全國中の警察は驚くべく進歩を爲しましたが民間の有志家は敗軍の兵士の如く全く氣力を失亡して容易に恢復することが出來ぬ樣になりました其の上世の民權家と稱するものの間には全國を結合し平和手段に因つて己れの主義を政治上に試むることをなさず動もすれば粗暴の擧動を爲し或る人が曾て評せしが如く數年來濟崩しの國事犯（ヒヤヒヤ）が頻りに世に行はれ前途に於て國家の大事を擔當する希望のある身を以て獄愁の下に呻吟し世間の人をして羨に堪へて奮を

吹き一般の民權家を目して粗暴の徒と見做し之れを擯斥する樣に至らしめました是等も亦民間に於て政治思想の退歩に就きし原因中の重なるものと謂はねばなりません(喝采)

少年は手に持つ所の手巾をテーブルの上に投げ忽ち眉を張りて大聲を發し

嗚呼諸君今より四五年前政黨の四方に起り國會の準備に奔走しました時には諸君も今より五六年を過ぐれば一國を擧げて大結合を爲し何時にても國會の必要に應ずることが出來ると思はれたでありませう然るに今日の勢は如何にも案外千萬にて喩へば日輪は既に西天に傾くも旅人は途中の茶店に午睡して其の側らに大呼するものがあれども更に目を覺さぬと同樣であります(然り〳〵)此の通りにて何れの時にか國會の停車場に達することが出來ませうか社會の誘導者を以て自ら任ずるものは今日に於て前途の方向を定めて運動を爲さねばなりません今試みに私の考へる所を擧げて諸君の御參考に供へます(謹聽々々)

第一學者實際家の協和を求めねばなりません前年政黨の四分五裂して結合の出來なんだのは學問のあるものと世故に慣るゝものとが互に水火氷炭の勢ひをなしたからであります小異を棄てて大同を求むるは後來社會の爲めに奔走するものの最も注意すべき所であります第二は務めて封建の迷夢を破らねばなりません我々は九州男子である我々は奥羽の人物であると云ひ土地に因つて相結合したのは明治十三四年頃の有樣でありますが此の習氣を打破らねば眞正の政黨の成り立つ氣遣はありません第三に激烈の言論に因つて下等人民の熱心を引き起すのは亦政事家の一時の方便でありますが之れが爲めに毒害を後日に流し意外の結果を生ずる患がありますから世の有志家は十分に御注意がなければなりません第四は空漠の議論を排斥して實際の事業を調査し我々の主義を實地に貫徹する準備を整ふるのは最も今日の急務かと思ひ哲學上の空理は姑く政事上に關係のない學者先生に任せて置いて宜しう御座います地方の民情を知り海外の形勢に達し制度法律を始め軍政警察より鐵道電信等の處置に至るまで十分に之れを取調べて實務に應ずるの用意がなければ國會が設立になつた所がトテモ政事を改良することは思も寄りません故に私は諸君が今日より此の四者に注意し二十三年に至りて日暮れ路遠しの歎息を發せられることの無い樣に願ひます

如何にも熱心を以て演べ畢り聽衆に一禮して壇を下れば滿堂の喝采姑く鳴りも止まざりけり程なく幹事は壇上に出で川岸萍水氏は病氣にて出席なきにより是れにて閉會する旨を告げしかば數百の聽衆は一時に起つて互に歸りを爭ひ井生村の門前は蟻の穴を出づるに異ならず

一人の少年は前にある男を呼び止め「松本君待ち給へ「オヽ君は先きへ出たかと思うたに迹だつたか今日の演說は隨分面白かつたネダが川岸の出なかつたのは殘念ヂャ「アノ國野と云ふ男は中々辯者で其上精神のあるのには感心する併し君にはアノ演說も耳に入らなんだらう「ナアニ「ダツテ君は演說の最中にも北の窓の下に居つた別嬪の方ばかり見て居たぢやアないか「馬鹿を云ふナ「君ではあるまいし「だが彼の女は中々の美人だぜ僕も些ツと喋舌る積古でもして彼樣美人に聞かせたいものだ「ハアヽ君でもソンナ大望心があるかネ演說の巧拙は吾輩之を保證せず君歸りに湯屋の二階へ上つて姿見で自分の御面相を點檢するが善いぜアハヽハ〳〵

第三回

鳥凡讀書獨傷情懷

赤心對客大談三形勢

蘇秦說二秦王一。書十上。而說不レ行。黑

貂之裘敝。黄金百斤盡。資用乏絶。去レ秦而歸。羸レ膝履蹻。負レ書擔レ囊。形容枯槁。面目黧黑。狀有二愧色一。歸至レ家。妻不レ下レ紝。嫂不二爲炊一。父母不二與言一。蘇秦嘗然嘆曰。妻不二以我爲レ夫。嫂不二以我爲レ叔。父母不二以我爲レ子。是皆秦之罪也。乃夜發レ書。陳二篋數十一。得二太公陰府之謀一。伏而誦レ之。簡練以爲二揣摩一。讀レ書欲レ睡。引レ錐自刺二其股一。血流至レ足。曰。安有二說二人主一不レ能下出二其金玉錦繡一取中卿相之尊上者乎哉。恭年揣摩成。曰。此眞可二以說一當世之君一矣と一人の書生が戰國策を讀み掛けて痛く心を動かせし樣子にて「何うも名文だ蘇秦が落魄の模樣を寫し出だして眞に逼つて居る三寸の舌頭で一世を動かす豪傑でも四方に飄泊して學資の盡きた時には婦女子にまで輕蔑せられ頭を擡ることが出來ぬから氣の毒千萬のものヂャ古今の人情は同じものと見える此の廣い世の中に我が大志を知るものがなく是れまで何事を爲しても失敗するばかりで遂には下宿屋の主人にまで低頭平身せねばならぬのは殘念至極のことである艱難苦勞は大業を成就する基であるに相違ないが世間には名を知られず功名を成すの時期も容易に到來せず國許の御兩親にまで一方ならず御心配を掛けるのは是非もないことであると稍や悲に沈みて又思ひ返し「イヤ是れ位のことで屈託してはならん蘇秦も一時の困難に逢うて志を勵ましトウ〳〵六國の印を佩る程になつたと云ふから我が瞻力才識を以て辛苦を凌ぎ大事業を成就する事の出來ぬ筈はない古人の歌にて『憂き事の猶ほ此の上に積れかし限りある身の心ためさん』とあるサウヂャ〳〵と獨り几上に向ひて或は歎息し或は憤發するは前章に見えし國野基なるが其の居る所は六疊半の小き二階にて古き備後疊は處々に破損を生じ紙窓風に吟じて日光を席上に注射し鼠色の壁には許多墨の斑點があり古びたる火鉢の上に鐵瓶を置けども火消え灰冷かにしてマッチの莢屑と紙卷煙草の吸殼あるのみ牀の上に洋籍六七卷と唐本五六帙を不規則に列べ其側らに幾つともなく捻ぢたる紙のあるは既に讀み了りたる朋友の手紙と文稿の書損なられん柱に羽織を掛け衣替へ細き本箱の上に横はり机上には眞つ黑くなりし赤間石の硯の側らに紅色の墨汁あり筆筒に數枝の禿筆と一本のペンとを立て其の間に封を切りたる郵便數通を插み一枚の赤洋氈を四つ折にして敷物となしたるは憐れ貧しき下宿屋の有樣と知られたり折柄ドン〳〵階子を登る聲があり障子を開いて入り來るは須田蠅之助と云ふ國野の朋友なり身には「スコッチ」の洋服を着して胷に銀の鎖を垂らしキョロ〳〵した眼にて四方を視回して席に就き「君相變らず御勉强ヂャナ 國「イヤ誰かと思うたら須田君かマア此處へ入らつしやいト云ひながらパチ〳〵手を拍つて下女を呼び 國「お松どん火を持つて來てソシテお茶を入れて下さい 須「お構ひ下さるなトキに先日は失敬君の演說は兩度とも世間で大評判の樣です君は好男子の上に辯舌が旨いから實に羨やましい先日井生村樓へ二度つづけて別嬪が來て君の顏ばかり詠めて居たから定めて君に『ラブ』したに違ひないと云ふ評判ぢやゼハヽアハヽヽと云へば國野はイト眞面目な顏付にて「僕は婦人が來て居たのには少しも氣がつかなんだ」須田は笑ひ乍ら「君だつて彼の美人が日に付かん筈はない 國「須田君僕は不肖ながら演壇に立つて婦人の爲めに心を奪はる樣な無精神の男では無いト不興氣に云ひ放てば須田は少しく顏を赤くし 須「ナニ君が『ラブ』したと云ふのヂャない君に『ラブ』はせぬかと云ふ想像話をしたまでだが君のお氣に障つて甚だ恐縮します時に先刻から君のお顏付を見るにどうも只ならぬ御樣子ヂャが何か御心配の

事でもあるのではないかナ　「何も心配と云ふ程でも無いが変と不平なことがあるのでト云へば須田は得たりと思ふ顔付にて一不平は有志家の常である今の世の中に少しく氣概があつて國事に憤激切齒せぬものは無い苦ぢや別して君の様な有爲の士は世に容れられず凡庸の奴等が得意の顔をして居るとは實に顚倒極まることぢやダガお互に志を成す機會の來るのも最早や遠くはあるまいとイト慷慨らしき顔付にて說き出だしヂット國野の顔を視れば國野は更らに動ずる様子もなく少しく笑を含み「ナアニ僕の不平は君の云ふ様な大層な事ではない　須ウーン夫れでは何の不平かネ　國お話し申すも餘り馬鹿馬鹿しいから……　須君の身上のことなら何もお隱しにならなくつても善いぢやアないかカウ御懇意になつた上は僕も出來る丈けは君の爲めに盡力しようから　國實は僕も是れまで諸方を飄泊して爲すこともなく歲月を經過し東京へ出てからは飜譯で活計を立てて居るが先月近代史の草稿を或る書林が出版すると云つて持て歸つたきり幾ら催促しても原稿代をよこきんから大分目的が違ひ先月から下宿料が滯つて居るので先刻も茲の主人に大層失敬なことを云はれ些と不平に思つて居る處へ丁度國許から郵便が屆いたから讀んで見ると兩親は僕の職業に就かぬのを氣遣ひ官途にでも出ることが出來ねば一日も早く歸國せよと云うて來たが今日の處では誠に兩親に對して申譯もない次第ヂャ僕は飜譯や著述で自分獨りの活計を立ることは出來るが兩親は老年の事であるから早く身を立てて月々の小遣でも贈つて安心させたいと思へども何分物事の齟齬するには閉口する須ハア君にも御兩親が在つて干渉を受けらるるかネ僕の親父などはドウモ頑固で仕方がない僕の取る少々の給料イヤナアニ小遣を送れとか早く國へ歸れとか云つて來るから近頃は殊に返事もせずに居るが元來天保時代の人間は誠に厄介ものサ丁年に達した男子を子供の様に干渉して進退を自由にさせぬ訣りでなく自分は隱居して子弟の素藥を求めようとするのは不心得千萬ヂャ君も知らるゝ通り西洋抔では父母は子に財産を讓る義務はあるが子から隱居料を出さす權利は無い君も祖會の改良を主張せらるゝ人だから自分の獨立さへ出來れば國許の御兩親が何と云はるゝとも氣に掛けるには及ばんヂャア無いかト得意になつて喋舌り立つれば國野は姑く詞なかりしがヤヽアッテ「須田君の御說には同意することが出來ん實に君の云はる迚り今日我邦にて父子の關係は全く支那の道德に支配せられ家庭の間に不都合の事が多いに違ひない父母は子女を奴隸の様に思ひ勝手に其の身體を使役し財産婚嫁のことまでも自由にさせず折角志を立てて職業に從事するものを呼び返して先祖の遺産を嗣げとか左右に侍養せよとか云つて終身の方向を誤らすのは世間一般のことで社會の發達上に餘程の妨害があるから我々は此弊習を一掃する様に盡力せねばならんシカシ夫れを實行するには順序があるもので輿論の注意を呼び起して一般の感情を變更するのが必要である父母は亞細亞の慣習を當然と思つて居らるゝ内に子の方から西洋流儀を持出して往くと雙方の考へが違ふから一家の間に風波が起り遂には天然の親愛心を失ふ様になるではないか別して我々の子供の内に父母が多くもあらぬ家財を費して教育をして下されたのは我々が生長の後に一家を立て老後の養ひをするであらうと云ふ考へであつたに違ひない夫れに自分の一人立ちが出來る様になると昔のことを忘れて仕舞つて直きに西洋風を一家の間に行はんとするのは些と無理と云はねばなるまい尤も我々が子供を持つた日には勝手に職業に就かせ自分は自分の財生で終身の活計を立て少し

も子供の素養を求めぬが相當だけれども亞細亞の慣習を以つて天然の規則と思つて居らるゝ老親に向つて歐洲諸國に行はるゝ父子の關係を說くことはドウモ僕には出來ん今日西洋のことは何にも知らず專制政治の無上の政體と心得たり自分では東洋一種の『モルソン』宗が信向で一夫一婦の制度すら守ることを知らぬ癖に文明とか開化とか云つて高恩を受けた父母を棄てて顧りみぬ人の多いのは困つたことでは無いか父子の親愛すら無いものが社會の爲めに一身を犧牲にすることが出來るものかト舞舌爽かに說き示せば須田は心の中に遣り損うたなと思ひ乍ら左あらぬ體にて「只今君の御議論を承はつて僕も始めて夢の覺めた樣な心持になりました君は實に孝子と云はねばならんダガ只今も社會の爲めに一身を犧牲にすると云ふ御口上であつたが君には御兩親があつても已むを得ぬ場合になつたら國事の爲めに一身を棄てる御決心でありますかト問掛けられて國野は屹度須田の顏を眺め「是れは改つて御尋ねのある程の事でも無い我々が社會を組織する以上は多數の幸福の爲めに必要な時には一身を棄ても社會の爲めに盡力せねばなるまい區々たる目前の艱難造り出だすことは出來ん僕も及ばずながら政事社會に居る上は如何なる不幸に出逢ふとも決して志を變ぜぬ積りであるが何分今日の有志家は當てにならん一時は餘程熱心の樣でもイツの間にか節操を變じて我々の反對に立つ樣な事物が多いから仕方がないト云へば須田はイト熱心なる顏付にて膝を進め實に君の御說の通りぢや以前から政黨などと云つて騷ぎ立てる奴の內輪を探つて見ると大方は腰拔けで第一番に命を棄る決心が無いから大事を遂げる氣遣はない一通りのことで社會を改革しようと思ふのは大間違と云ふものヂャ我々は公然の運動ではトテモ目的を達することは出來んから決死黨を組立て祕密手段で遣り付ける外は無いト云ふを遮り國野は嚴重なる顏付にて「須田君餘り聲が高いぜ今の御話しでは君は過激の手段を喜ぶ人の樣に聞るが僕は輿論に因て政事の改革を成就する決心だから前後を顧慮せぬ粗暴の事は眞平御免だ」須田は忽ち顏を眞赤にして「君は又因循なことを云ではないか我々が眞誠の自由を擴張するに普通の手段で目的が達せらるゝものか國「ハアー君も三四年前自由黨の壯士が云た樣な言を吐かマア能く考へて見給へ明治政府には許多の常備兵がある上に全國に巡査が配置してあるから民間に何程の不平家があつても差向き腕力の競爭に打勝つ事は六ツケ敷からう元來社會の關係は全く優勝劣敗の作用であるから政治家を以て任じながら政權を熱望せぬ者はない筈である勝利を得て政府の地位に立つものは務めて權力を維持し他人の爲めに奪はれぬ樣に注意し又民間に在つて志を得んものの機會に乘じて政權を掌握せんと欲するのは取りも直さず生存競爭の自然と云ふものヂャ有體なところが英國などの政黨政治も此の競爭心を實地に利用するまでで實は理窟も何にも無いことと思ふダ立憲政體の場合と違ひ專制の邦國で優者の地位に立つものが能く基礎を固める時は政府を保護する屈强の城壁があるから民間に在るものは容易に競爭することは出來ない政府は勝手に法律を制定し勝手に租稅を賦課することが出來るし兵隊も巡査も皆政府の指揮に從うて動くから危險の手段を以て政府に抵抗する者を制止することは世話も無いことである現に福島事件や加波山の暴動などは世の民權家の爲めに不利益な結果を生じたでは無いか腕力家の諸方に飛び出すのは大方失望から起るので社會に勢力があつた政黨がメチャ〳〵になつた結果であるから社會の率先者を以つ

て自ら任ずるものは能く注意をせねばなるまい須、世間では君を激論家の様に思うて居るが御説を聞いて見れば、サウでも無い様デャハア〳〵ダガ君の御議論では世の中の事は皆んな政府に打ち任せて置いても善い譯ですがソシテ今日の模様では二十三年にはドンナ國會が立つ御見込みでありますか御説を伺ひたいものです　國人民が奮發せねば國家の維持が出來るものか輿論が一致さへすれば不完全な國會の立つ氣遣はあるまい　須君の御説は能く分つたが正義社員は皆な君と同意かネと問ひ掛くれば國野は暫く考へ乍ら「川岸は權謀家だから心情は容易に測られぬが時世を見る才氣があるから馬鹿なことをする氣遣はあるまい其の内才子に似合ず金錢に心を奪はれるのがアノ男の一大缺典だ武田は感心に正直な男だが議論の粗暴なのには些ト閉口サと云ふを聞きつゝ須田は風と何か思ひ出せし様子にて時計を出して一寸眺め「イヤ四時が過ぎた今日は三時から武田君と外へ往く約束があつたにツイ話しに身が入つて忘れて居つた誠に御勉強の御邪魔をしました」ト立ち上り暇乞して歸り去るを國野は下まで見送つて元の座に返り手を束ねて考へ乃ら口の内にてアノ男は學問は無いが諸方を歩行て色々なことを聞き出して來るから面白いと思うて交際をして居たが今日の話しの模様では何だか怪い處がある様デャ出放題に粗暴なことを言ふ奴には胡亂なものが多い兎角人を煽動して釣り出さうとするから劍呑でならぬ同志の様な顔をして居る正義社員の内にも隨分須田の様な奴が有るだらうト言ひ掛けて風と後を顧りみれば障子の外に人影があり聲高に旦那は御出ですかと云はれて何故か國野の顏色忽ち土の如くになりたり

第四回

數月逋債店主罵窮生　一字誤寫郵書醸奇禍

今室内に入り來たるは此の家の主人各藏と云へる男にて年齡四十五六とも思はれ何處となく顏に滋味がある人に嫌はるゝ人相なるが木綿袷の上に縞の絮入れ羽織を引掛けイト横柄に國野の前に座を占め腰より大きな烟草入を取り出だし長き眞鍮の烟管にて烟を輪に吹きコン〳〵烟草盆を敲き乍ら屹と國野の顏を眺め「旦那は餘りヒツコイと仰しやいませうが私も商賣柄の事で御座いますから又々御催促に出ました今朝御話し申した一件は如何仕舞を付けて下さいます御積りかネと云はれて國野はハツト思ひ氣の毒さうなる顏付にて「貴君に對して申譯の無い事だがドウカ今一兩日お待ち下さることは出來まいか其の内には原稿料が來るであらうと思ふから」各藏はヘタ〳〵笑ひ乍ら「國野さん此の間中から原稿料々々々と口癖の様に仰しやるがソレハ何時お手に入るので御座います　私も本屋には隨分知る人がありますが此の節の不景氣で學者の書いた書物でもメツタに賣れませんから書生さんの手から出たのは『ロハ』でも取合人がないさうです旦那は定めて能く御出來なさるでありませうが失數ながらマダお年が御若う御座います先刻も用事があつて隣の間まで參つて聞けば大層御朋達と御議論をなさいました此の節の書生さんは口計り達者で腕が無い様ですナ私も數年此の商賣をして居りますから隨分書生さんにも當り合せましたが初めは國から學資が來るとか同縣の人の世話になるとか云つて二三ケ月は下宿料もどうかかうか下さるものの段々と滯りが出來ると何處へか逃げて仕舞つて往き先の分らぬ様になるのが幾らもありますト云ひつゝチツト國野の顏を眺め「旦那につてはソンナ事は御座いますまいが私も商法のことですから何時までもお心安立てをして居ることは出來ませんが今日にも半金お入れ下さることが出來ませねば誠にお氣の毒ですが滯つて居る金子は慥かな受人をお立てなさつて御懇意

な先へでも御轉居を願ひますト詞するどく述べ立てられ國野は少し顏を赤くし一御亭主の云はるゝのは御尤も千萬だが只今の處では一寸外へ行く先もなく甚だ當惑します少々外へ頼んで置た事もあるからドウゾ暫時の御猶豫を願ひたいものだがお聽き下さることは出來まいか吝藏はムットして懷中より一ツの書付を取り出し乍ら聲を荒らげ「旦那積つて御覽なさい最初お出の時に一ヶ月五圓五十錢の處を五圓にお負け申して蒲團も上等の分をお貸し申したが先月から下宿料を頂戴しません上にお客のあつた時の酒代や牛肉代に時々お立替申して置た郵便印紙まで合して見ると此の書付通り八圓九拾六錢になります何ぼ諸色が安いと云つたつて家稅も出れば地代も出るし又此節では溝浚が八ケ間敢から家を持つて居ても割に合ふ話しではない旦那今お拂が出來ねばソノ眞黑な表紙の付いてある書物でも御渡し下さい二圓か三圓にはなるだらうと此間から鑑定を付けて置たト机の上を指させば國野は迹を振り向いて「ウン此の『ウエブストル』の辭書かネ之れをなくすると今日から飜譯をするにも困るから是れ丈けは御免を蒙りたいものだ」吝「夫れでは旦那の方の御都合は善からうが私が困ります金を下さることが出來ねば今から御立退き下さい是れだから書生さんは大抵鬱わるのだ金のない癖に能く人の內の飯を食つて居ることが出來るものだト怒に乘じて惡口雜言を列べ立てられ流石の國野も一度は憤然とせしが其の身に金を拂はぬ落度があり理窟を云ふべき場處でなければ講壇に立つて數千人を感動せしむる雄辯家も舌が滯りて返す辭がなく心中の怒を抑へ顏色を赤くし差し俯く吝藏は眉間に青筋を出し又もや何か言ひ出さんとする所へ靜に障子を開いて此間へ入り來るものあり誰ならんと見ればお松と云ふ此家の下女なるが年は十六七にて身に纏ひし衣裳は粗末なれども容貌もサマデ醜くからず氣轉のきく風なるが大きな封狀を手に持ち一寸國野の前に膝をつけ「國野さんお手紙が參りましたト差出すを手に取り見れば表に「國野先生へ無名氏より」とあり國野は心に不審を抱き封押し切れば白紙に包みしものズロ〳〵と膝の上に落ちたり上封に「金子三十圓」と認めてあるにゾコハ合點の行かぬことと思ひ乍ら書狀を引き出し展べて讀めば書風もイト優美にて左の如く認めたり

我が意中の人よ身を棄てて國に許すは丈夫の事なり君の素志を達する豈遠きにあらんや君に日下の必須あるを聞き失敬を顧みず別封を呈す今や我身に於て明言すべからざることあり已むを得ずして暗投に出づ他日青天白日與に談話するの時あるべきなり他人の目を忍んで此の書を認む文意を達せず萬に御諒察を禱る

早々

五月　日　　無名氏

國野先生

侍史

國野は再三讀み返せども誰れの手迹とも分らず別封を取り上げて中を改むれば三十圓の紙幣があり餘りの不思議に姑し眉を蹙め「お松どん此の手紙は何處から來たのかネ使が居るなら委しう聞いて下さい」お松はニッコリとして「何處から來たのか分りません使は車夫の樣でしたが差置きて宜しいからト云つて直ぐ歸つて仕舞ました國「夫れは殘念な事をしたなト云ひつゝ又も手紙を展べ「ドウモ見慣れぬ書風だが文章も簡短で妙だ誰れだらう少しも考へが付かぬ是の時まで吝藏はキロ〳〵として側にて模樣を窺ひ居たるが面に笑を含み大きなる口を開き「アハハ、、、旦那お近附でもない人からお金が參りましたのですか夫れは豪氣な事だ」國野はイト落付たる聲にて「左樣受けて善いか惡いかは知

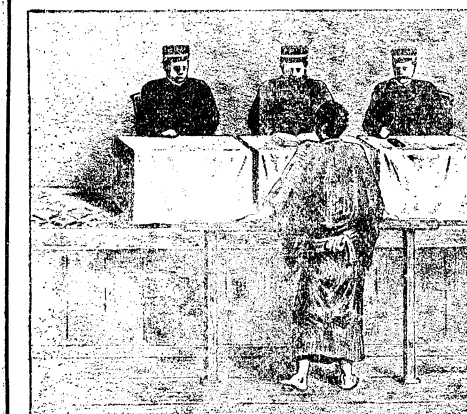
らぬがチャント此方の名前が書てあるからヨモヤ間違でもあるまい御亭主此の金子の内で下宿料をお取り下さいト紙の上に載せたる紙幣を客藏の前に投出せば客藏はニコ〳〵して「ハハア旦那は豪氣な者だ名前を隱して金子を贈すものが滅多に世間にありますものか旦那は御若いに能く御勉强をなさるので内の者も皆な譽て居ります其の上世間の評判では旦那は演說とやらもお上手だと云ふことですから今に御出世が出來ませうハアヽお松下へ往くならお茶を替て來なソシテ御火鉢の火も消えかゝつて居るぜお召をアー放つて置くと云ふ事があるものか些トお疊み申せト俄かに變る迫從輕薄も紙幣の力と知られたりお松は立て下に往けば客藏はパラ〳〵紙幣を數へ乍ら「旦那折角のお思召で御座いますから此の三十圓の内で前月分五圓丈を頂戴して置きまして跡は又此の月末の御勘定に致しませう是れは有り難う御座います時に此間から旦那に御相談を致さうと思つて忘れて居ましたことが御座います御存じの六號の書生が先日國へ歸るとき下宿料が拂へなかつたもんですから書物を五六册置て往きましたが極安くしますから御入用の品がありますればお買ひ下さい近頃は讀べが八ケ間しいので減多に古本などを買ふ人がないので困ります　國「アノ山本とか云ふ男の持て居たのなら碌なものはありまいが序に一寸見ようか　客「どうか願ひますト云ひつゝ今受取りし紙幣を紙に卷き起つて下に往き持ち來りしは七八册許りの古本なり國野は手に取つて表紙を見ながら「コレは振氣篇に山陽詩稿だ彼の男も詩が好きであつたと見える英書は何だ『ユニオンリードル』第三第四『カクケンボス』米國史英和辭書『ダイヤモンド』是れ限りか僕には一ツも入用がないが友人の武田と云ふ男が近々旅行するので此の『ダイヤモンド』と云ふ本を尋ねて居たから五十錢位なら僕が買つて置いても宜しい　客「お見せなさい誠に細い字だ是れでも讀めますものかネ旦那何とか仰しやいましたナ　國「『ダイヤモンド』と云ふ字引サ　客「よろしう御座います五十錢で差上ませう國「ソレハ有り難い早速武田に知らせて遣うから御亭主一寸御免下さいト几に向うて引出しの中より卷紙を出だし硯に水を注ぎ手紙を認め掛れば亭主は其處に撒き散したる書籍を取納め乍ら　客「エーそれダイ〳〵『ダイナマイト』の外には御用は御座いませんか　國「差向き此本の外に……アヽ仕舞つた御亭主が傍で『ダイナマイト』と云ふからツイ手紙にも『ダイナマイト』と書た『ダイナマイト』が手に入つたと云つたら何だか破壞黨の樣に聞える能く消して置かねばなるまいと筆を取つて又々五六字書き入れて封じ袋に入れ「先づ是れで宜しい御亭主は如何して『ダイナマイト』と云ふことを御存じだネ　客「ヘイ先達て内の御客さん達が新聞を讀では『ダイナマイト』を註文したとかせぬとか云ふことを話して居らつしやツたのがツイ〳〵耳に留つたので御座いますと云ふに國野は覺えずハヽと笑ひ「成程サウであつたかアノ公判も隨分世間で色々評判をしたが無罪放免になつたのは誠に仕合なことであつたダガ君子は巖牆の下に立たずデ大志を抱いて居るものは嫌疑を避けることに注意をせねばならぬ御亭主下へ御出でなら此郵便をお賴み申しますソシテ行燈を點ける樣にお松どんに云ひ付けて下さい古語に曰く禍福は常に人意に及ばざる所に出づト此の時一大厄運は將に國野の身上に落ち來らんとし今點す行燈に夜風の吹き入るに異らざるを知らざるは神ならぬ身の是非もなし

第五回

書生閑新聞　警官墨謔　徒輩囚　徒首服

△河田君起きんか朝寢も程があるモウ九時だぜと呼び立てられ一人の書生が蒲團の中より首

を出し「アー昨晩夜更しをしたから睡くてたまらん何時君が來たか少しも知らなんだ △起きべし起きべし今朝の新聞には大變な事があるぜ ○「又人を吃驚さして迹で笑ふ積りだらう △虚言ではない此の新聞を見給へト云はれて書生は蒲團を卷つて起き出で新聞を手に採り「ナニ『國野武田の二氏拘引せらる　近來正義社中にて名聲ある國野基氏は昨日午前十時ごろ愛宕下二丁目の寓居より拘引せられたり又武田猛氏は



（雷除官因徒ヲ訊問スル圖（初版本挿畫））

九州邊へ赴くとて横濱まで出掛けたるが汽船宿にて取押へられ直ちに警視第二局へ送致せられたり風説に據れば武田氏の居宅に容易ならぬ書面もあり國事犯の嫌疑とか云へど眞僞は保證せず』ウン是れは大變だが些ト思ひ當ることもある此間から須田蠅之助が頻りに國野と武田の擧動を探る樣子であつたから何か事件があつて證據の出たのと見える君は委しいことは知らぬか △今新聞を見た計りで直きに飛んで來たのだ 松本君に聞いたら委しい事が分るだらう ○松本は昨晩遲くまで歸らなんだが内に居るか知らんト云ひつゝ次ぎの間に向うて松本君松本君と呼び立つれば「オーイ今其處へ往くわト答へて一人の書生が出で來り「藤井君お早う國野と武田は飛んだ事をしたぢやアないか △左樣僕も新聞を讀で驚いたが君は別して二人に懇意だから定めて事情をお聞きだらう ○「イヤ僕は昨日夕方に兩人の拘引になつた事を聞いたから懇意な新聞社を始め方々飛び歩いて見たが何分色々な風説で取留めたことが少しも分らんダガ先づ確かな處から出た話しに國野が武田から輕まれて爆裂藥を買つたとか註文をしたとかで證據になる書面もあると云ふから僕も實に驚いたことサ ○「ソレが實説なら誠に困つたことヂャ武田は隨分腕力家と聞いて居るから無理もないが國野君は學者でもあるし平生から着實で粗暴な事が嫌ひだと云ふ評判の人だにナゼそんな馬鹿げたことを思ひ付いたのだらう ○「どうも人は見掛けに因らぬものと見えるト彼處の下宿此處の樓上も二氏が拘引の取沙汰のみなれども確かな事實とては絶えて知る人なかりけり却説國野基は五月十日朝用事ありて外出せんとする處へ一名の巡査が探索掛り一名を伴ひて寓樓へ入り來り國事犯の嫌疑に因り拘引する旨の令狀を示し其の儘車に乘せて警視第二局へ送り其の跡へ又々巡査が來りて家主に立會を命じ室内を搜索して書面數通を取り押へて持ち行きたり國野は身に罪を犯せし覺えなけれども如何なる嫌疑によりて斯くは拘引せらるゝこととなりしかと種々に疑惑を起し午ら二時間ばかり拘留所に留め置かれ遂に取調所に呼出されたり國野は手を木柵に掛けて上を視上ぐれば長き「テーブル」を前に置き黑の制服を着したる警官三名相列んで泰然と椅子により「テーブル」の上には筆硯の外に許多の書類があり警官は孰れもイト嚴重に構へたり若し他の場所にて逢ひしなれば普通の瀬付なるかも知れざれども拘引せられて取調べを受くる國野の思に

は其の容貌の非常に猛惡なる樣に見えしならん中央なる警官の主任と覺しく屹と國野の顏を眺め靜かに口を開き國野の身分職業より平生交際するものの名前等を委しく取調べたる上にて「其方は本月二日に武田猛へ宛てて郵便を出したる覺えがあるか ト問はるゝにぞ國野は一寸考へて 二日でしたか三日でしたか慥に日は覺えませんが本月差入りに武田へ向けて手紙を差出したことは記憶致して居ります 警 さうであらうそして其の用事は如何ことで手紙は如何な文體であつたかネ 國 文體は慥に覺えませんが武田の兼て所望いたして居りました書物が手に入りましたから其の事を報知致したので御座いますト云へば警官は少しく笑を含み「イヤ夫れ計りではあるまい其方が武田に何か決心をする樣に勸めたことがあるだらうト問はれて國野は姑く首を傾け勘考の體なりしが稍やあつて「御尋問に因つて思ひ出しました武田は九州地方へ遊歷に參る考へでありますのに同社中で差止めるものがあると承はりましたから他人の爲めに制止せられずに早く決心をして出掛けるが善いと申す樣な主意を認め置きましたかと存じます 警 夫れならば其の手に入つたと申す書物はドンナ本であつたか 國 極く小さな英語の字書で御座います 警 愈よ相違ないか 國 相違御座いませんト云ふにぞ主任の警部は左右にある同役と顏を見合せて何か細言き机上にある一通の手紙を出だし「此れは其の方の書いたのに違ひあるまいネト問はるゝにぞ國野は手に受取りて之れを見れば一度紙屑籠にでも入りしと思はれ皺付き油染み紙の迹の方は半分ばかり裂けたれども紛ひもなき己れが武田へ與へし書簡にて

前略御決心の事は同志中にも異論可有之候得共御斷行可然候兼て御望みの

ダイヤモンド 手に入り候間御知らせ申上候餘は面談に讓る草々頓首

五月二日　基　拜

武田君

是れがドウシテ其の筋の手に入りしかと驚き乍られ「是は私の武田に差出しました手紙に相違御座いませんト云ひつゝ紙面を返せば警官は面を正し嚴き聲にて「然れば書物を買ひし抔とは跡方もなき僞りであらう前には同志に異論あるとも決心の事を斷行せよと書いてあり跡の墨にて抹殺してある所を透して視れば、ダイナマイト』の文字が明らかに見え其の傍らに『ダイヤモンド』と書直してあつても申譯の立たぬは高が下宿屋に居る一書生で一顆數千金の價のある金剛石を買取る筈はなからう若し愈よ金剛石に違がなくば其品は誰の手から出たのであるぞ其の後愈よ武田に手渡したか又は其の方が所持して居るか有體に申立よト嚴重の調べに國野は少しも屈せずカラ〳〵笑ひ乍ら「前後の事情を御承知なき御方が此の手紙を御讀み取りに爲りましたなら御不審の起るも無理では御座いませんが決心と申すは前に述べました通り九州遊歷のことであります『ダイナマイト』とあるは全く一時の誤寫でありまして其の書き直してあります『ダイヤモンド』と申すは英語の袖珍字書で御座いますト夫れより國野は手紙を認めし時の樣樣を委しく陳べ立て爾々の事情なれば武田を始め下宿屋の主人を御調べあれば分明に相成るべしと辯說滔々水の流るる如くなれば三人の警部は案に相違し互に顏を見合せ姑く詞なかりしが又々一通の書面を出だし此の手紙は誰れから受取りしものであるかト問はるゝにぞ國野は手に取て之れを一讀し 國 矢張り其の當日に誰れとも知れず匿名にて金子を贈り越しました書面でありますと答ふれば警部は冷笑ひ「名を知らぬものから金子を差贈りしと云ふは些と受取り難い話しヂヤないか其の上に此の文面に就いて考へて見れば前々から交際があつて能く其の

方の心底を知つて居るものの樣に思はれる其の方は此の暗投の文字を如何に解釋いたすか無名生とあつても其の方の心には誰れが書たのであると云ふことが十分に分つて居るだらう 國「イヤ暗投と申すは支那の熟語で御座いまして明珠暗投壯夫按劍と云ふ熟語から出たもので交際のない人に書を贈る時などに使用する文字であります又此の手紙は見慣れん書風でありまして文字は四角でありますが何處か孱弱な處があつて婦人の手蹟の樣に見えますから私も今日まで不審が晴ませんト云へば中間にある警部はソット同僚に目示しながら一善く分つた夫れで宜しい今日の取調べは是れ限りに致す就いては其方に申し聞け置く事がある此の手紙の出處に就いては只今其方も明白に辯解が出來ぬと見える又武田に贈つた書面も同樣である假令墨にて抹殺したにもせよ國家の大法にては其の職業のものの外は取扱ふことの出來ぬ爆烈藥卽ち『イナマイト』の手に入りしト書てある上は本官に於ても十分に取調べを致さねばならぬに因り取調中監獄へ留め置く間左樣心得ヨと申渡されて國野はハット驚き何か言はんとせしに警部は再び辭を繼ぎ「扨て是れからは本官の職權を以て申すのではないが貴公は隨分世間へ名を知られたる人では無いか若し當今の政事上に就いて意に滿たぬことがあつて何等の企てを爲し事の失敗に就く上は包み隱さず明白に申立るが大丈夫の擧動と申すものであらう國野基とも云はれる男が小人匹夫の如き詐僞の申し立を爲し跡から事實が現はれる樣なことがあつては己れの良心に背く計りでなく世間に對して後日までの恥辱であらう證據物を引き揚げ引合人も夫れ〳〵取調べてあるから此の場に及んで如何に陳述するにも證據のあるものを纏案することは出來まいから篤と精神を落ち附け勘考せらるゝが善からうとイト懇ろに說き諭し恥を知つて自決せよと勸むるは國事犯人を取扱ふに經驗ある警察官と知られたり國野は身に犯したる罪はなけれども嫌疑を招く形跡もありて一時に辯解することは出來難からんと思へば頭を抵れて一言も發せず腰繩に掛り獄丁に引き立てられ悄々として監獄に赴きしぞ憐れなる

第六回

斷腸獄中半日雨 激志中上一首歌

東京の未決監は鍛冶橋內警視廳の構內にあり四方二重に高き黑塀を繞らし巍々として雲表に聳ゆるの勢あり其の中央は圓形にて二層樓四方に張出して十字形を爲し樓上樓下とも圓形室を看守人の詰處となし獄舍は左右相對して都て四十房に分つ房の四方は板張にて白き脂膠を塗り前面に井字形に組み立てし開き戸ありて大なる鐵鑰を卸し後面高さ五尺許りの處に硝子窓を設け麻索を以て之れを開閉し其の內部に鐵檻を設く一房の廣サ四疊半にて半疊はながし兼帶の雪隱なり其の上に黑色の小桶あり大少便の用に供す其傍らに水桶を置く水一升ばかりを入るべし五六人にて盥漱淨水とも一桶水の外之れを使用するを許さず夜は燈火を點ぜざれば暗黑にして咫尺を辨ぜず三冬の嚴寒にも室內には火氣なく蟣蝨の集りたる二枚の毛布にて寒夜の長きを凌がざるべからず其の北風を受くる所にては「ガラス」障子の隙間より飛雪を吹き入れて手足皆な凍裂せんとす又三伏炎熱の際には少しも風を通さず其の南に向きし房に至りては日中鐵窓より日光を射下すれども之れを避くるの場所なく宛ら鼎中に煎らるゝに異ならず看守の劍を帶び洋服を着して儼然と倚子に倚る有樣は閻魔大王と見え獄丁は虎の皮の犢鼻褌を結ばざれども囚徒の之れを怕るゝ赤鬼青鬼の如く病室に病者の呻吟するは亡者の叫喚かと怪まれ眞に是れ生きながらに陷る現世の地獄とこそ云ふべけれ玆に樓下の一房は表面に三十號と記して

側らに囚徒五人の名札を掲げ房中に居列ぶものは孰れも一癖あるべき面相にて肉相せ眼四み顔色青白く衣裳の汚穢なるは繪に畫ける餓鬼に彷彿たり獨り其の内の一人は二十四五と見え人品の善き少年なり今や此檻中に午飯を分ちしと覺しく穢れたる白木の雜當箱に極の下米と割挽麥を混ぜたる飯を低く盛り惡臭き香物を二切れ割り付けたるを四人ながら舌を鳴して食ひ終れども少年は一寸箸を付けたる割りにて側に置くを見て年齢四十五六に見え眼中のするどき男は少年に向ひ「お前さんはマダたべられませんか召食らにや私が頂戴しやせう二人前喰つても腹が滿くれりやアしないハヽー　少年「茲に來た時から嫌な臭がするので早や三四日立つても未だ十分に食氣が出來ん此の狹い處で五人が順番に大小便をするから臭氣があつて胸が惡うてならん君方は昔な能く物が食べられるナと云へば側らに在る男が「食はずに居れば死んで仕舞はアネ朝は水の樣な味噌汁で晝は此通り香物が二切れ夕飯は蓮根か燒豆腐で身になりさうな者は一つもないが慣れて見れば是れも御馳走サ仕合せにお前さんの樣な人と同檻になつて時々差入れ物を少しづつでも分けて貰ふのが何より有り難いダが牛肉や玉子に鹽を付けて喰はうとすると看守が見付けて齒を磨く爲めに渡してあるのだから喰ふ事はならぬと云つて叱るから仕方がない　少年「食鹽は人間に一日もなけりやならぬものだのに此の節差入れの出來ぬのは譯の分らん話しだソシテ茲にある鹽を食物に付けて喰ふのを止めるは飼り苛酷と謂はねばならん運動は一週間に僅かに十分あまりしかなく檻中で立つて居れば小言を喰ふ膝を崩せば叱られるし二六時中正坐をして居らねば成らぬのは健康に善くない事である是れが外國人であつたら半時間も坐へて居ることは出來まい看守を呼んで申したてて見たら如何だらうト云へば一人が「滅太な事を云ふと何時でも良民を妨害して政府の御手數を掛ける身であり乍ら勝手な事が云はれるものかと散々に叱られます私も德川時分から臭い飯を喰つたことのある男だが御一新になつて牢の中の模樣がサツパリと違つて少しは善くなつた樣だが隨分此の比では嚴重で困る事があります先比までは髪が延ればすぐ剪で呉れるし鬚が長くなれば剃て貰ふ　とが出來たが今では皆んな御廢止サ其の上前方は每號に石盤と石筆が渡して有つたに取り上げて仕舞つたから一寸何か申立る事も六ツかしうなりました　少年「左樣か監獄のことだから我儘の出來ぬは當然のことで取締りの嚴重なのは尤も千萬の事だが未決囚は禁錮や懲役になつたものと違ひ國法上でも有罪人とは見做さぬことだから用來る丈は囚人に便利を與へても善かりさうなものだ懲戒するとか改悟さすとか云ふは既決監のことで未決人を取扱ふ道ではあるまい是れと云ふも百人が九十人まで惡黨で日の離されぬことが多いものだから自然に規則が嚴重になつて來るのヂャと云ひかけイヤ失言した　氣が附き急に辭を更へ「お前方は何んな嫌疑で茲にお出でになつたのか些ト お話しを聞きたいものだ　云へば前の四十五六の男は冷笑「此の檻には碌な奴は居ません氣のきいて居るのは熊公計りだお前から話しネエと云へば顔に痘痕があつて筋骨の逞ましき男が　熊「私や靜岡もので子分が十餘人もあつて人も殺せば强姦もするし命が二つあつても足りネエ男だ丁度牢へ這入つたのも今度で五度目サと云へば少年は吃驚して熊の顔を眺め「今日まで能く無難に濟んだナア　熊「何時も破牢サ田舍の牢を飛出すのは世話も苦もないが此の監獄は中々堅固だから手が付けられネエだが仕合なことには今度も靜岡へ送られさうだから箱根山で美事に繩脫をして見せる積だ娑婆へ出たらば又お前さん方

に御目に掛る事もありませう　少年「ヘエー夫れでも護送の途中では兩手を縛られて巡査が付いて居るではないかネ　熊「繩をスリ切つて巡査を谷底へ蹴落す丈けのことだソレはさうと小田原の大工さんは口書が濟んだと云ふから明日にも市ケ谷へ行くだらうから此の間の話しを能く聽いて置かねばならんが御前の敎へて呉れた小田原の丸持は彼の通り筋から見える白壁のある内だネ　石締の模樣はお前の話しで大抵分つたが召仗は幾人居るかネ　大工「確か五人と思ふヨ　熊「五人位なら大丈夫だ　時に金太手前今朝の呼出しは如何だつた」十七八計りの一寸小利口さうな小僧は「ウーン仕方がねえから皆んな云つて仕舞つた　熊「アレ程已れが言つて聞かせて置いたに白狀すると云ふことが有るものか利口な小僧でもまだ場所に慣れネエから仕方がネエナソシテ金太貴樣の樣に奉公先の金を盜だ位では市ケ谷や佃島へ往ても頭が上らネエから今度出たら已れが敎へてやつた通り些つたア大きな仕事をするが善いぜト話すを聽て四十四五の男が「旦那宇の中の話しは何時もこんなものだが旦那方は吃驚するだらうネ」少年は笑ひ乍ら「昔から宇屋は惡事を習ふ學校だと聞いて居たが誠にそれに違ひない昔は西洋も同樣であつたがベンザムと云ふ人が出掛けて來て獄屋の建築方や囚徒の分け方に法則のある論を立て各國政府も其の說を採用して獄屋の風を一變したので次第に罪人の數が減じたと聞いて居るが日本でも早く獄制を改良したいものだト云へば熊は目を剝出し「此の内に居てソンナ馬鹿な事を云ふ奴があるものか　少年「左樣お互に一つの鎖に繫れた猿の樣なものだから　熊「お前さん檻内で猿と云ふことは禁句だぜお氣を附けなさい」此の時房外に忍び廻りの巡査が居たりしと見え大聲にて「三十號は騷々しいぞ些ト靜に致せ」（編者曰く此の處にては四十四五の男は如何なる人物なるやを知るに由なけれども蓋し維新前一の博徒にて屢ば獄に下り近來は改心して正業に就き人力車夫仲間にて親分と仰がるゝ一の俠客なるが子分の犯罪により連累の嫌疑を受けて茲に下りしなり其の姓名は花間鶯の中編に至つて說き出だすべし）此の一聲に每房談話の聲を絕ち寂寥として人なきが如し方さに是れ六月中旬にて霖雨數日絕間なく陰霧窓に入りて囚衣爲めに濕ひ點滴の蕭條たる人の腸を斷たんとす折から聞ゆる遠寺の鐘聲ボーン〳〵少年は默然として頻りに悲哀の情を催し獨り熟ら思ふ樣我れ生中に政事家となるの志を立て四力を奔走すれども更に事業のならざるのみか一朝の不注意よりして獄中に入り盜賊博徒と起臥を同うする身となり犯せる罪はなけれども二通の手紙が嫌疑の基となりて度々の吟味を受け此の身と同日に拘引せられて此の樓上にある武田を始め證據人と思つて居る吝藏などは何と申し立てたか模樣は少しも分らず萬一も辯解が立たずして有罪と極つたらば輕くも三四年以上の重禁錮を受くるであらう然れば此の虛弱の身で獄中の鬼となるに違ひない早く兩親の命に從うて國に歸るか左もなくとも前年機會のありし時彼の家に養子に行つたなら斯る不運に出逢ふこともあるまいと思へば誠に殘念なことである國許の御兩親は此のごろ御無事であるか此の身の災難をお聞きなされたらサゾ御愁傷の事であらう古語に疾風に勁草を知ると云へど高き枝は折れ易きの喩へに洩れず嗚呼身を處するの道を誤りしト天質剛毅の身なれども獄屋の苦痛に壯心も摧け目に持つ涙を同囚に曉られまじと側にある手巾取つてたがしに臨み數滴の水を掌に灑ぎ顏を洗ほんとしたる時如何なしたりけん手巾をペッタリながしに落せば手巾の水に濕ふに從ひ墨き文字の現はれ出るにぞ是れは不審と目を定めて能く見れば一首の歌なり

霜雪のおもきにたへて男々しくも

はるをばまつの猶たてるかな

少年は繰り返して讀み乍ら「此の手巾は昨日是れまで名前を知らぬ松本某から牛肉に添へて差入れて呉れたのであるがサテは我が危難に逢うて志を變ずることもあらんと思ひ明攀にて書寫し規戒の意を寫せしものと見える如何にも松柏は雪霜に逢ひて其の節操を現はし丈夫は困難に當る毎に愈よ其の志を堅くする譯だ昔より英雄豪傑の事業を大成せしは皆艱難辛苦の結果だと云ふことは是れまで内外の書を讀んで能く知つて居ながら女々しき心を起せしは我れ乍ら不覺十萬なり扨ても勇々しき此の歌は何人の吟咏なるか知らねども我が身に取つては一生の良師ヂャ天下の人に先きだつて政事を改革せようと思うて社會の風潮に當る上は一度や二度獄中に陷るは當然のことだ一時の艱難の爲めに志操を變ずる樣ではトテモ大事業を成就することは出來まいト自ら心を勵まし乍ら「ハテ此書風はドコヤラ見覺えがある樣ヂャがドウモ親友の内には是れ程な和歌を咏む男はないハテ誰れだらう早く青天白日の身になつて歌の本人に逢うて禮を言ひ度いものぢやがドウカ明日も呼び出しがあれば イ、ガト腹に手を入れ弧の刺せし迹を掻きツ、壁に倚り姑く詞なければ熊は傍より「旦那モウ茲へ來たらナンボ悔よ悔よ思うても仕方が無いソレトモ婆婆にある色のことでも思ひ出しやつたのかネハア、

編者曰く此の章に記する所は余が十年前獄に下つて自ら日撃せし所と一二の朋友より聞く所を參取せしものなるが監獄の制度も次第に改良に就きし由なれば今日の事情に適當せざる所も多からん讀者之れを諒せよ

第七回

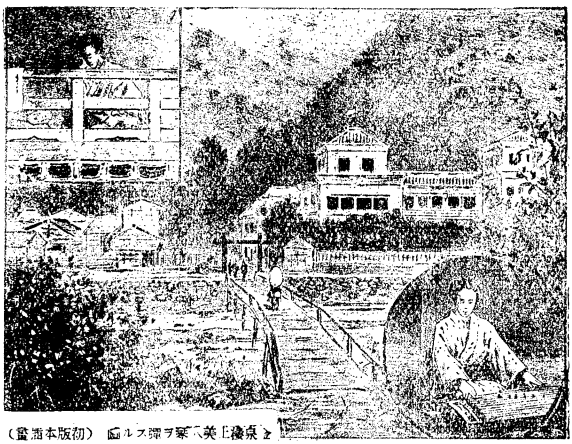
少女動ず名士心十三絃
秀才認恩人書卅一字

高山峨々として蒼翠を含み其の麓を流るゝ谷川は石に激して飛湍となり其の轟き洶湧として風雨の如し茲は箱根七湯の一なる湯本なるが溪に臨んで二ツの西洋風の三層樓あり屹然として相對するは世に名高き福住樓なり頃は七月の末にて都會の炎暑を避けんとて此内に投宿するもの數知れず樓上樓下とも大方は明き間の無き程になれり右の方の下座敷を貸切りしは如何なる人なるか軒に掛けし簾に蔽はれて顏は見えねども滔々と流るゝ瀧の音に和して妻琴をきみ鳴らすも奥ゆかし

ゆかりよしあるはつ草のわか葉のうへを みつるよりいとゞかわかぬ袖の露なほきまさるたびねかな」うつゝなやひとりねよはのまくらにふきまよふみ山おろしに夢さめてなみだ催す瀧の音」いざさらばみゝ人にゆきてかたらん櫻ばな木の間のけしきことなるを風よりさきに見せばや」かくれがふかきおく山のまつの戸ぼそをまれにあけてまだ見ぬ花のかほばせをみるよりぬるゝ衣手」たそがれすぐる折からほのかに見てし花の色にまよふ心はあさがすみ立ちわづらふぞもいうき一いつしかにくみそめてくやしと聞し山の井のあさながらもさりとてはたえぬちぎりをたのまん

と風に傳ふる若葉の一曲を一方の樓上にて餘念もなく頤を支へて聽き居たる一人の書生が「此の高山流水の間に琴聲を聞く時は伯牙鐘子期の故事も思ひ出される聲と云ひ調子と云ひ誠に妙だが何處の女だらうと獨言ちつゝ廊下を通る下女を見認め「オイ〳〵お初どん〳〵 下女「ハイ何御用で御座います 書生 鐵瓶に湯を入れて來て下さいソシテ向うの下座敷で琴を彈くのは誰れだ 下女「アレハ昨日から御逗留になつて居ります御女中でありますマ慥か東京の御方ですヨ

書生「サウ別嬢かネ　下女「ハイ御年は十八九でありませうが誠に上品な上に温和な方ですワソシテ琴がお上手な計りでなく御歌とやらが能く出來ますと先刻も此樓の隱居が大層誉めて居りましたト聞いて書生は心にうなづき「ソレハ妙だ夫人なら先刻拾つた咏草も彼の女のだらう同伴は御亭主かネ　下女「イヽエまだお娘子の樣でして御母さんか叔母さんか知れませんが五十計りの人が御一緒にお出でです」書生は「さうか」ト云ひ乍ら暫し躊躇の體なりしが「お初どん一寸と云ひつゝ耳に口を付けて何やら細語けば下女は點頭きて「承知しました慥か御女中は旦那を知つて御出でなさる樣ですからお目に懸け度いものがあるからドウゾ御逢ひ下さる樣にと申して見ませうト立ち掛けて書生の顏を眺め「旦那そのお顏では別嬢さんには逢はれませんヨ　書生「ナゼ〳〵　下女「ソレでも其處で御晝寢をなさいましたと見えて袖へ疊の跡が付いて居ますからサ早くお湯を召してお出でなさいヤヤ御茶の事を忘れて居たト鐵瓶を手に下げドン〳〵と階子級を下り往く抑も此の樓上に在る書生は彼の國野基にて五月の初め手紙に書きし文字の行違よりして警視第二局へ拘引せられ一通り吟味の末掛官も多分無罪ならんとは考へしものの容易ならざる嫌疑事件にて匿名書の出所も分明ならず其の上連累人の武田猛の陳述に少しく不審の處もあれば自然に國野の取調べも捗取らず之れが爲めに一月餘りも獄中にありしが國野の口述と引合人の申立てと一々符合して別に疑はしき事跡も見えねば七月の中旬に至り武田と共に放免となりたり炎暑の時節にて獄中の疲勞もあればとて湯治を思ひ立ちしが二三年前箱根に遊びしことありて此の家の主人と



（初版本插畫）

も別懇なれば五六日前より此の地に來り山水の眺望よき一間を借り切りて靜かに保養を爲し居たるに風と向ふの座敷にて調ぶる琴の音の耳に入り本人を問へば已れが好める文雅の道にも關からぬ少女の由にて且つ少しく心に思ひ當ることもあれば話しをして見んものと思ひ下女に頼んで面會の儀を申込みしに今風呂場より出でしまゝなれば程なく此方より御尋ね申しますとの對へなりしかば取り散して置くも失敬なりと思ひ其處にある書物や「カバン」などを片付ける内に「御免下さいましト優しき聲にて唐紙を開き徐に玆に入り來る一人の女を視れば世に珍らしき美人にて白き浴衣に黑繻子の帶を締め髪を銀杏返しに結び湯上りの素顏にて涼やかなる眼元に少しく紅を帶びたるは桃花の今咲き初めし趣きあり國野は心に驚き乍ら膝を正して差向ひに座を占め雙方一通りの挨拶終り　少女「私は昨日から貴君の此處へ御出のことは承知して居りましたが御目に掛ることを願ひますのも御迷惑かと存じまして差控へて居りましたが貴君も先達ては誠に御災難で御座いましてドノ樣にか御難儀で御座いましたらう私は是れまでシミジミ御挨拶を致したことは御座いませんが御名前と御顏は能く存じて居りますから蔭ながら

お氣遣ひ申しましたがマア宜しい御都合で御座いましたソシテお顏に少しもお勞れの御容子が見えませんヨと愛嬌ある眼にてソット國野の顏を眺むれば國野は覺えず少しく顏を赤くし「誠に馬鹿なことを致しましてお話しにもなりませんそれで貴女は　私　を知つて居ると仰しやるが何處で御目に掛りましたらうネ」少女は手を口に當ててホ、〳〵と笑ひ「何處でも宜しう御座いますわ貴君の樣に御名前があつて世間の廣い御方は誰れも存じて居ります」云はれて國野は首を傾け「ドウモ不思議でなりません貴女の御宅は何方で御座いますソシテ親御の御名は……」少女「宅は笑地で御座います兩親とも疾く無くなりまして只今では叔父の世話になつて居ります　國「左樣なら今度の御同伴はどういふ御方ですか　少女「ハイ叔母で御座います　國「失敬ながら貴女の御名前は　少女「春と申します　國「さうで御座いますか先刻下で琴をお彈きなさるのを聞いて居て感心しました琴は誠に上品なものですが此の溪川の音につれます時には別して感動を引起しますソシテ貴女は餘程御上手の樣ですから　春「アレ御冗戯ばつかり私は餘り琴は好きませんが下座敷の牀の間に置いてありましたから徒然の餘り彈いて見たので御座いますが中絶して居りますから調子も合ひませずサゾ御八ケ間しう御座いましたらう　國「八ケ間しいどころか誠に面白う御座いましたソシテ貴女は和歌もお味みなさるさうですネ」お春はニッコリしながら「イ、エそんなことは存じませんヨオホ、ヽヽ、　國「何もさうお隱しなさるには及びませんト云ひつゝ　御床　の机の上にある短册をお春に示し是れは貴女の御咏草では御座いませんかト問はれてお春は不審顏「夫れがどうして貴君のお手に入りましたか　國「先刻風呂場の上り口で拾ひましたが見れば女の手の樣でもあるしハテ誰が落したのだらうと思ふ内に下女の話しで屹度貴女の御咏歌であらうと考へ付きましたから御目に掛けたいものがあると云つて御面會を願つたのですト云ひながら再び短册を手に取り上げ

玉くしげはこれおろしや早からじ
　雲のゆくへもさだめかねつゝ

「失敬ながら誠に御秀吟と思ひますト云はれてお春は心がイソ〳〵として「オホヽ誠に腰折れでお恥に預かる樣なものでは御座いません國「野さんは定めて玆へ御出になりましてから澤山に御詩作が出來ましたで御座いませうドウカ拜見を願ひたう存じます　國「イヤ二三首作りましたがどうも未だ推敲が足りません何卒御正刪を願ひたいものですト云ひつゝ硯を引寄せ膝の上に卷紙を置きサラ〳〵と認め差出すは七言律詩には

獄窓幾度夢二函山一。好脫二囚衣一濯二澗泉一。
近枕水聲時訝二雨一。入レ窓雲影却疑レ煙。
半生孤介心如レ石。一病淸臞骨欲レ仙。
堪喜眼前相識在。辱顏不レ改犂依然。

お春は口の内にて再三讀み返し「私には十分なことは分りませんが前聯は此の地の實景でありまして第五句は貴君の御精神第六句は御出獄後の御風格で御座いますそして結末は御自分を箱根山に比らへて雪霜に逢うても色を變へぬ松柏にも勝る御節操をお寫しなされたものかと思はれますト聞いて國野はさてはト思ひ「只今の御口上で私の心に當ることがあります」「霜雪のおもきにたへて男々しくもはるをばまつの猶たてるかな」此の一首は慥かに貴女の御咏歌で御座いませうがな」お春は國野の顏を眺め何か言んとしてオホヽとテヒ「イ、エ私は存じませんヨ　國「御承知のない筈はありません猶御聽き申さねばならん事があります」云ひつゝ一ツの蜆口の中より一通の手紙を取り出してお春に示し「お春さん此の手紙は男子の用ふ

る文體に認めて無名氏と書いてはありますが短冊の御手蹟と能く似て居る樣ですから若しや御心覺えは御座いませんかト云はれてお春は顏赤らめ差し俯いて辭なければ國野は覺えず歎息し「夫れで何もかも分りましたがお春さん此の手紙では隨分苦勞しましたト是れより下宿屋にて手紙を受取りし時の有樣より警視にて取調べを受け辯解に困りし等の事情を委しく話せばお春は氣の毒さうな顏付きにて「國野さんどうぞ堪忍して下さいまし女の淺智慧で濟まぬことを致しました此の上は何にもかも打ちあけて御話しを致さねばなりません元と私は田舍で女教師をして居りましたが東京へ出て見ますれば女の風儀を改正するなどと世間で八ケ間しう云ひますが上等の婦人方さへ少し計り英語を習ひなさるとか舞踏の稽古をなさるが勢一ぱいでしてそ其の餘のことは誰も心掛る人が無い樣で御座います此の世の中で男子を助けて歐米諸國と肩を比べる樣にするには女でも少しは政事上のことを知らねば成らぬと思ひましたから一兩度井生村の演說會へ傍聽に參りましたが貴君の御演說を承る度に感心をいたしましてお慕はしく存じます內に不圖御難儀の筋があるとやら承りましたから及ばず乍ら御力に爲つて上げたいものと思ひましたが私も母の遺言を守つて尋ねる人のある身の上ですから淨かと名前は出されませず其の上貴君の御氣質では近づきもない女の癖に差し出がましいことをするとお憤りなされまして金子をお返しなさるは必定と存じましたからワザと名前を隱して男の手紙の樣に書いたのですが夫れが御嫌疑の一ツになりましてサゾ御迷惑なことで御座いましたらう又アノ歌とても同樣で御座います貴君の樣な御人でも長い牢屋のお苦しみで御志の屈することがありはすまいかト思ひ過しまして前後の考へもなく致したことで御座います馬鹿な女と御襲視の上定めてお腹も立ちませうが幾重にも御勘辨を願ひます　國「何して腹の立ちますどころではない彼れと云ひ是れと云ひ貴女の御親切は一生忘れは致しません別して一時の困苦の爲めに節操を變へはせぬかと松柏に寄せた御咏歌は十分に私の肝に銘じました今の世に珍らしい女丈夫の御心底國野基などの及ぶ所では御座いませんシテ只今尋ぬる人のある身と仰しやいましたが夫れは又何處の何と云ふ御方ですト問はれお春は「ハイと言掛けて口籠り「其の人の名前は只今少し御話し申し兼ますが早や三四年立つても行方が知れませんから迚も逢ふことは出來ますまい私は兩親も兄弟もない身で御座いまして叔父と云ひますも實は他人の事ですから何時も苦勞が絕えません爰で貴君に御目に掛りましたのは此の上もない私の仕合せで御座います色々お話しを申しまして御思召を伺ひ度いことも御座いますから何卒是れを御緣にして賴み少ない私の身を不憫と思つて下さいましト話し乍らに少しく涙ぐむは類まれなる才女にても其の身に掛る災難に當惑することありと知られたり今や此美人才子が差向ひにてヒソ〳〵語ふを蔭にて聞きしなれば誰も妬ましく思ふならん折柄向うの下座敷より「お春〳〵と呼び立つるにそ　春「オヤ叔母が歸つて來たと見えますドレお暇を致しませう玆の御座敷は能く風が通りますネア、涼しいこと些ト彼方の座敷へも御遊びにト……云ひつゝ起んとして又坐りしが又もや「お春〳〵と呼ぶ聲の聞ゆればお春は一誠に御邪魔をいたしましたト心殘して歸り往く後姿を見送り乍ら國野は姑く梯子段の上に立ち「容貌も美な上に驚く程發明な女チャなア